

條約彙纂補遺

外務省

7-0199

0123

條約彙纂補遺目次

各國、部

朝鮮國

一 漢城條約 (和漢文) 明治十八年一月九日

一 絕影島地所借入約書 (和漢文) 明治十九年一月三十日

一 朝鮮各港ニ於ル帝國郵便局ノ用品輸入税免許約定

(往復文各一通) 明治二十一年五月

一 日韓通漢規則 (和漢文) 明治二十二年十月十二日

一 月尾島地所借入約書 (和漢文) 明治二十四年十月廿一日

一 日韓盟約 (和漢文) 明治二十五年八月廿六日

丁抹國

一 電信機條約 (和英文) 明治三年八月廿五日

一 丁抹電信會社ノ免許狀 (和英文) 明治六年十二月廿七日

一 長崎電信局新設條約 (和英文) 明治七年七月一日

一 電信料拂渡約定 (和英文) 明治十一年三月廿三日

獨逸國

一 日獨間ニ於ケル小色郵便物交換約定 (和獨文)

明治二十七年七月廿日

大不列顛國

一 帝國通信省ト加那太國郵政廳ト間ニ於ケル郵便為

替規約 (和英文) 明治廿二年五月十六日

一 帝國通信省ト大猶列顛郵政院ト間ニ於ケル改正郵便

為替約定 (和英文) 明治廿三年五月廿日

一 帝國通信省ト加那太郵政廳ト間ニ於ケル閉蒙小色郵

便交換約定 (和英文) 明治廿三年九月三日

一 同進和約定 (和英文) 明治廿五年十一月九日

一 同追加約定 (和英文) 明治廿七年九月十一日	一 帝國ト香港トノ間ニ於ケル郵便為替方法規約ノ修正 (和英文) 明治廿六年三月三日	一 英通商航海條約及議定書 附稅目 (和英文) 明治廿七年七月十六日	一 新日英條約實施方通知期限ニ關スル公文 (和英文) 同	一 英國殖民地新日英條約ニ加入ノ條件ニ關シ英政府ヨリノ公文 (和英文) 同	一 右ニ對スル帝國政府ノ回答 (和英文) 同	一 約定稅目ノ價格ニ關スル覺書 (和英文) 明治廿八年十月廿九日	一 日英兩國間追加條約 (和英文) 明治廿八年十月廿日官報	葡 萄 牙 國 外 務 省	一 日葡締結ノ條約中領事裁判權ニ關スル條款無効ノ件 (勅令) 明治廿五年七月十四日	露 西 亞 國	一 官報電信料減額取極書 (和佛文) 明治十五年十二月四日	一 日露通商航海條約及議定書 (和佛文) 明治廿八年九月十日	一 別約 (和佛文) 同	一 日露旧條約有効ノトニ關スル宣言 (和佛文) 明治廿八年九月十日官報	一 日露間稅則ニ關スル往復公文 (和佛文) 同	一 新日露條約實施方通知期限ニ關スル公文往 (和佛文) 同
-----------------------------	---	---------------------------------------	---------------------------------	--	---------------------------	-------------------------------------	----------------------------------	------------------	--	---------	----------------------------------	-----------------------------------	-----------------	--	----------------------------	----------------------------------



布哇國

一日布哇國、條約中領事裁判權ニ関スル條款無効ノ件(勅令) 明治廿七年四月十日

一布哇國ノ國籍證明適用ノ件(和文) 明治廿七年四月十三日

墨西哥國

一日墨修好通商條約(和西英文) 明治三十年五月三十日

一國籍證明書規則(和) 亞米利加合衆國 明治廿二年七月廿九日

一日米通商航海條約及議定書(和英文) 明治二十八年二月廿七日

清國

一天津條約(和漢文) 明治八年四月十八日

附照會(和漢文) 司

一輕木板ノ抽税ニ関スル公文(漢文往復書三通) 明治廿一年四月

一難破船救助償還約定(漢文往復書二通) 明治廿三年五月

一休戰條約(和漢英文) 明治廿八年三月三十日

一追加休戰條約(和漢英文) 明治廿八年四月十八日

一批准書交換證書(和漢文) 明治廿八年四月八日

一媾和條約及議定書(和漢英文) 明治廿八年五月十日

一別約(和漢英文) 同

一臺灣受渡公文(和漢文) 明治廿八年六月二日

一清國軍費賠償金任辨ニ関スル議定書(和漢文) 明治廿八年十月六日

一奉天半島還付ニ関スル議定書(和漢英文)

明治廿八年十月八日

一奉天半島還付ニ関スル條約(和漢英文)

明治廿八年十二月三日

伊太利國

一日伊通商航海條約及議定書(和英文)

明治廿八年八月十六日

一日伊間稅則ニ関スル往復公文(和英文)

明治廿八年八月十七日官報

一新日伊條約實施方通知期限ニ関スル公文往(和英文)

同

西班牙國

一大平洋ニ於ケル日西版圖ノ境界ニ関スル宣言(和佛文)

外務省

明治廿八年八月七日

聯合之部

一 萬國電信條約加入承諾書 (和佛文)

明治十二年一月十七日

一 萬國郵便聯合條約 (和英文)

明治廿四年七月七日

一 日耳曼外二十五箇國間ニ於ケル郵便為替事務約

定 (和英文)

明治廿四年七月七日

一 萬國郵便條約第十六條中ノ修正 (和佛文)

明治廿七年二月六日

省

漢城條約

此次京城ノ喪辱ル所小ニ非ス

大日本國

大皇帝深ク

宸念ヲ軫セラレ茲ニ特派全權大使柏爾爵井上馨ヲ簡ヒ

大朝鮮國ニ至リ便宜辦理セシメラル

大朝鮮國

大君主

宸念均シク敦好ニ切ニ乃チ金宏集ニ

委ヌルニ全權議處ノ任ヲ以テシ

命スルニ懲前毖後ノ意ヲ以テセラル兩國ノ大臣

和衷商辦ニ左ノ約款ヲ作り以テ好誼ノ完全ヲ昭

カニシ又以テ將來ノ事端ヲ防ク茲ニ全權ノ文憑

ニ據リ各々名ヲ簽シ印ヲ鈐スル左ノ如シ

約款

第一

朝鮮國

國書ヲ修メテ

日本國ニ致シ謝意ヲ表明スル事

第二

此次

日本國遭害人民ノ遺族並ニ負傷者ヲ恤給ニ暨

テ商民ノ貨物ヲ毀損掠奪セラル者ヲ填補シ

テ

朝鮮國ヨリ拾壹萬圓ヲ撥支スル事

テ

第三

磯林大尉ヲ殺害シタル兇徒ヲ査問捕拿シ重キニ從テ刑ヲ正ス事

第四

日本公館ハ新基ニ移シ建築マルヲ要ス當ニ朝鮮國ヨリ地基房屋ヲ交附シ公館暨ヒ領事館ヲ容ルニ足ラシムヘシ其修築増建ノ處ニ至テハ

朝鮮國更ニ貳萬円ヲ撥交シ以テ工費ニ充ツル事

第五

日本護衛兵弁ノ營舎ハ公館ノ附地ヲ以テ擇定シ壬午續約第五款ヲ照ラシ施行スル事

大日本國明治十八年一月九日

特派全權大使從三位勳一等伯爵井上馨印

大朝鮮國開國四百九十三年十一月二十四日

特派全權大臣左議政

金宏集印

另單

一 約款第二第四條ノ金円ハ日本銀貨ヲ以テ莫ス類ラク三個月ヲ期シテ仁川ニ於テ撥完スヘシ

一 第三條兇徒ヲ處辨スルハ立約後二十日ヲ以テ期ト為ス

大日本國明治十八年一月九日

特派全權大使從三位勳一等伯爵井上馨印
大朝鮮國開國四百九十三年十一月二十四日
特派全權大臣左議政 金宏集印

外務省

此次京城之變所係非小

大日本國

大皇帝深軫

宸念茲

簡特派全權大使伯爵井上馨至

大朝鮮國便宜處理

大朝鮮國

大君主

宸念均願敦好乃

委金宏集以全權議處之任

命以懲前毖後之意兩國大臣和衷商辦作左約款以

照好誼完全又以防將來事端茲據全權文憑各

外務省

簽名鈐印如左

第一

朝鮮國修

國書致

日本國表明謝意事

第二 恤給此次日本國遭害人民遺族并負

傷者暨填補商民貨物毀損掠奪者由朝鮮國撥

支拾壹萬圓事

第三 殺害磯林大尉之凶徒查問捕拿徒重

正刑事

第四 日本公館要移新基建築當由朝鮮國

交附地基房屋足容公館暨領事館至具修築增

建之處朝鮮國更撥交貳萬圓以充工費事

第五 日本護衛兵弁營舎以公館附地擇定
照壬午續約第五款施行事

大朝鮮開國四百九十三年十一月二十四日

特派全權大臣左議政 金宏集印

大日本明治十八年一月九日

特派全權大使從三位勳一等伯爵井上馨印

另單

一 約款第二第四條金因以日本銀貨其須期三箇
月於仁川撥完

一 第三條完後處辦以立約後二十日為期

外務省

大朝鮮開國四百九十三年十一月二十四日

特派全權大臣左議政 金宏集印

大日本國明治十八年一月九日

特派全權大使從三位勳一等伯爵井上馨印



絶影島地所借入約書

今般日本政府ニ於テ海軍用石炭ヲ儲藏スルノ倉庫
ヲ建設スル為メ朝鮮慶尚道絶影島中黒石岩ト称ス
ル所ノ地所四千九百坪一坪ハ每方
ニシトルヲ借受タリ其地租ハ
毎年銀貨貳拾円ト定メ以テ朝鮮政府へ拂入ルヘシ
即チ換約ノ日ヨリ起算シ毎年陽曆十二月十五日限
リ明年ノ地租ヲ日本公使館ヨリ統理衙門へ前納ス
ヘシ因テ茲ニ約書ヲ訂立シ地圖ヲ添付シ以テ憑信
ヲ昭カニスル者ナリ

大日本明治十九年一月三十一日

臨時代理公使

高平小五郎印

大朝鮮乙酉十二月二十七日

督辦交渉通商事務

金 允植 印

外 務 省

租借絶影嶋地基約草

茲因日本政府為海軍建造倉庫貯藏煤炭租借朝鮮慶尚道絶影嶋中町称黑石岩之地地基共計四千九百坪^{一坪合}所有地基租額定以每年銀貨貳拾圓完納朝鮮政府即自換約之日起算於日本公使館每屆陽曆十二月十五日先將明年租額交付統理衙門查收立約草並附地圖以昭憑信

大朝鮮 乙酉十二月二十七日

督辦交涉通商事務 金允植

大日本明治十九年一月三十一日

臨時代理公使 高平小五郎印

外務省

朝鮮各港ニ在ル帝國郵便局ノ用品輸入税免許約定
 以書翰致啓上候陳者各國公使及總領事ヲ除ク
 ノ外何國領事館所用ノ物ニ論ナク概テ照例徵
 稅ヲ行フ旨貴曆丁亥十二月初四日御書翰ヲ以
 御申越有之候處在釜山我電信局需用物品ノ義
 ハ兩國設海底電線條款第一條ニ所有該地此項
 應用電線器物均由朝鮮政府准其免納進口稅及
 積塲稅下ノ明文有之候ニ付該局用品ハ無論輸
 入免稅ノ筈ニ有之候
 後テ在谷港我租界ニ設置セル郵便局ノ儀ハ原
 ヲリ内外ノ信路ヲ開通シ各國公衆ノ便利ノ為
 ニセル者ニテ電信局ト同性質ニ有之候ニ付テ
 ハ凡ソ郵便局ニ屬スル用品ハ貴政府ニ於テ特
 ニ優待ヲ加ヘラレ電信局ノ例ヲ照シ輸入免稅
 相成候様希望致候尤モ局員ノ自用品ノ如キハ
 章程ニ遵照スヘキハ不候言候右貴督辦於テ御
 承諾ノ上ハ其筋ハ御達相成候様御取計有之度
 此段及御照會候敬具

外務省

明治二十五年五月二十五日

代理公使 近藤真鋤

督辦交涉通商事務 趙秉式閣下

大朝鮮督辦交涉通商事務趙

為

照覆事、照得、我曆四月十五日、接准

貴公使來文、內開、海底電線條款、第一條內載、所有
該地此項應用電線、均由朝鮮政府免納進口
稅、及積場稅、明文、則是無論已、且如設、實於各口、我
租界之郵便局、原為開通內外之信路、各國公眾之
便利起見者、而與電信局無異、則凡屬郵便局需用
物件、請貴政府、特加優待、照電局例、免納進口稅、至
於局員自用物件、應遵章程、固不俟言、理合備文、照
會貴督辦、查照、允諾、轉飭該管官等、因在案、茲准
來意、特加優待、通融辦法、除將該郵局需用物料、免
納進口稅、轉飭我三口稅務司、遵辦外、相應照復
貴公使、請煩查照可也、須至照會者。

外務省

右 照 覆

大日本代理公使近藤

戊子五月二十四日

（我明治卅三年七月三日）

日本朝鮮兩國通漁規則

大日本朝鮮國政府ハ日本明治十六年七月二十五日朝鮮開國四百九十二年六月二十二日兩國全權大臣ノ協議訂定セル朝鮮貿易規則第四十一款ニ據リ兩國海濱ニ往來捕魚スルモノ、為ニ漁業稅ヲ定メ取締規則ヲ立ルヲ必要トシテ日本政府ハ代理公使近藤貞鋤ニ委任シ朝鮮政府ハ督辦交涉通商事務閣種默ニ委任シ各委命ヲ奉ヒテ會議定立スル各條左ノ如シ

第一條

兩國議定地方ノ海濱三里日本國海里ノ算測據以下之ニ準ス以内ニ於テ漁業ヲ營ントスル兩國漁船ハ其船ノ間數所有主ノ住野姓名及乗組人負ヲ詳記シ其船主若クハ代理人ヨリ願書ヲ認メ日本漁船ハ其領事官ヲ經テ開港場地方

外務省

廳ハ朝鮮漁船ハ議定地方ノ郡區役所ニ差出シ該船ノ檢査ヲ經テ免許鑑札ヲ受クヘシ但ニ免許鑑札ハ漁業ノ時必ラス携帶スヘシ

第二條

漁業免許ノ鑑札ヲ受クルモノハ漁業稅下ニテ左ノ割合ニ照ラシ税金ヲ納ムヘシ而シテ此鑑札ハ之ヲ受ケタル日ヨリ滿一年間其効ヲ有スルモノトス
乗組人 十名以上 日本銀貨拾圓
同 五名以上九名以下 同 伍圓
同 四名以下 同 參圓

第三條

漁業免許ノ鑑札ヲ受ケタル此國漁船ハ其捕獲シタル魚介ヲ彼國ノ地方ニ於テ販賣スルコトヲ得ヘシ



ト雖彼國政府ニ於テ衛生上又ハ其他ノ事故ニ由リ
一般ニ販賣ヲ禁シタル魚介類ハ之ヲ販賣スルコト
ヲ許サス

第四條

兩國ノ漁船ハ漁業免許ノ鑑札ヲ受ケタルモノト雖
モ特許ヲ得ルニアラサレハ兩國海濱三里以内ニ於
テ鯨鯢ヲ捕獲スルコトヲ許サス

第五條

此國ノ漁船彼國海濱三里以内ニ於テ地方ノ禁制ニ
背キ魚介其他海産ノ蕃殖ヲ害スヘキ方法ヲ用ユル
コト勿ル可ク又ハ各地方ニ於テ魚介ノ種類ヲ限リ
其捕獲ヲ禁制シタル時期ニ方リテハ彼是ノ漁民決
シテ該魚介ヲ捕獲スルコト勿ル可シ

外務省

第六條

兩國地方官署ノ官吏ハ此規則ヲ執行スル為ニ必要
ナリト認ムルトキハ該地方海濱三里以内ニ在ル彼
國漁船内ヲ査檢シ若シ違犯者アレハ之ヲ押留スル
コトヲ得但シ朝鮮地方官ニテ日本船ヲ押留シタル
トキハ其趣速カニ最寄日本領事官ニ通知シ該規則
ニ從テ處分ヲ求ムヘシ

第七條

漁業免許ノ鑑札ヲ受ケスニテ海濱三里以内ニ於テ
魚介ヲ捕獲シ若クハ捕獲セントシタル漁船ハ五円
以上拾五円以下ノ罰金ニ處シ其捕獲物ヲ没收ス

第八條

第一條免許鑑札ヲ携帯セサルモノ第四條ヲ犯スモ

ノ及第六條地方官吏ノ検査ヲ拒ムモノハ壹円已上
 貳円已下ノ罰金ニ處ス但シ第四條ヲ犯シタルモノ
 ハ別ニ捕獲シタル鯨鯨ヲ没收ス
 第一條乘組人負ヲ偽リ税金ヲ不足納シタルモノ
 ハ其不足高二倍ノ罰金ニ處ス
 第三條禁制ノ魚介ヲ販賣シ及第五條魚介漁獲ノ
 蕃殖ヲ害スルノ方法ヲ用ヒ若クハ禁制ノ魚介ヲ
 捕獲シタルモノハ日本海濱ニ於テハ地方規則ニ
 照テシテ處ス朝鮮海濱ニ於テハ壹円已上貳円
 已下ノ罰金ニ處シ其捕獲物ヲ没收ス
 第九條
 漁業鑑札ヲ他人ニ貸附シ海濱三里以内ニ於テ魚介
 ヲ捕獲セシメタルモノハ貸者借者共ニ該鑑札ニ相
 當スル税額二倍ノ罰金ニ處シ其捕獲物ヲ没收ス
 第十條
 兩國議定地方ニアラル海濱三里以内ニ於テ魚介
 ヲ捕獲シタルモノハ漁船漁具及ヒ其捕獲物ヲ没收
 ス
 第十一條
 此規則ニ據テ處スヘキモノハ日本海濱ニ於テハ
 日本地方裁判所ノ裁斷ニ歸シ朝鮮國海濱ニ於テハ
 其地方官ヨリ最寄日本領事館ニ告訴シ其裁斷ニ歸
 スヘシ
 第十二條
 此規則實行ノ後更ニ増減スヘキ事項出來スル下キ
 ハ双方協議改正スルヲ得漁業税ニ至テハ此規則調

17

印ノ日ヨリ二年間施行ノ後渙利ノ有無ヲ看テ再ヒ
改正スヘシ

茲ニ双方記名調印シ右確實ナルヲ証スルモノナリ
大日本國明治二十二年十一月十二日

代理公使

近藤真鋤印

大朝鮮國開國四百九十八年十月二十日

督辦交涉通商事務

閔種默印

外務省

朝鮮兩國通漁章程

大朝鮮國政府據朝鮮開國四百九十二年六月二十二日日本明治十六年七月二十五日兩國全權大臣協議訂定之朝鮮通商章程第四十一款欲為往來捕魚於兩國海濱者定漁業稅立管辦章程朝鮮政府委任督辦交涉通商事務內種默日本政府委任代理公使近藤真鋤各奉委命會議定立左開各條

第一條

凡於兩國議定地方海濱三里依日本國海濱法已下準之以內欲營漁業之兩國漁船須詳記其船廣幅之尺數所有主之貫籍姓名及搭坐人負由其船主或代理人繕具稟單日本漁船呈經其領事官交通商口岸地方官署朝鮮漁船呈交議定地方郡區役所候經查驗其船請領準單但漁業時必

須攜帶準單

第二條

領漁業準單者須照左開算法完納金額以充漁業稅而此準單自領收之日起至滿一年間為有其效用者

搭坐人

十名已上

日本銀貨拾圓

同

五名已上

同伍圓

同

四名已下

同參圓

第三條

領有漁業準單之此國漁船雖得將其捕獲魚介販賣於彼國海濱地方然彼國政府為衛生起見或因其他事故通行禁止販賣之魚介類不准販賣

第四條

兩國漁船雖領有漁業準單者非得時准則不准於兩國

海瀕三里以內捕獲鯨鯢

第五條

此國漁船於彼國海瀕三里以內勿違地方禁制以用妨害魚介及海產蕃殖之方法並於各地方正當限以魚介種類禁制其捕獲之時期則彼此漁民斷勿捕獲其魚介

第六條

兩國地方官署之官吏倘若認為照行此章程所必要則可得查驗在該地方海瀕三里以內之彼國漁船若有違犯者並行押留但朝鮮地方官押留日本船時當將其由迅速報知就近日本領事官請照此章程處辦

第七條

遇有不領漁業准單於海瀕三里以內捕獲魚介或欲行捕獲之漁船處五円已上拾五円已下罰金沒收其所捕獲之物

外務省

獲之物

第八條

遇有不帶第一條准單者犯第四條者及拒第六條地方官吏之查驗者處壹円已上貳円已下罰金但犯第四條者另行沒收其所捕獲之鯨鯢

偽報第一條搭坐人負短納稅金者處二倍其短額之罰金販賣第三條禁制之魚介及用第五條妨害魚介及海產蕃殖之方法或捕獲禁制之魚介者在日本海瀕則照地方規則處辦在朝鮮海瀕則處壹円已上貳円已下罰金沒收其所捕獲之物

第九條

遇有將漁業准單借與他人於海瀕三里以內捕獲魚介者不論借與者假用者均處二倍該准單稅額之罰金沒

收其所捕獲之物

第十條

在兩國議定地方外之海嶺三里以內捕獲魚介者沒收其漁船漁具及其所捕獲之物

第十一條

據此章程應行處辨者在日本國海嶺則歸日本地方裁判所之裁斷在朝鮮國海嶺則由其地方官知照就近日本領事官歸其裁斷

第十二條

施行此章程後遇有應行增減之事則得彼此妥議改更至漁業稅照此章程自蓋印日起限二年施行後看漁利有無再行商改茲彼此記名蓋印以昭憑信

外務省

大朝鮮國開國四百九十八年十月二十日

督辦交涉通商事務閣 種熙印

大日本國明治二十二年十一月十二日

代理公使 近藤真鋤印

月尾島地所借入約書

今般日本政府ハ海軍用石炭ヲ儲藏スルノ倉庫ヲ建設スル為朝鮮國京畿道月尾島ニ於テ地所四千九百坪一坪ハ海方ニテトタルヲ借受タリ其地租ハ毎年銀貨八拾円ト定メ朝鮮政府ニ耕入ル者トス即換約ノ日ヨリ起算シ

毎年陽曆十二月十五日ヲ以テ明年ノ地租ヲ日本公使館ヨリ統理衙門ニ前納スヘシ因テ茲ニ約書ヲ訂立シ地圖ヲ添付シ以テ憑信ヲ昭カニスルモノナリ

大日本明治二十四年一月二十一日

代理公使

近藤真鍮 印

大朝鮮開國四百九十九年十二月十二日

督辦交涉通商事務 閔 種默 印

(別紙地圖畧之)

外 務 省

租借月尾島地基約草

茲因

日本政府為海軍建造倉庫貯藏煤炭租借

朝鮮京畿道月尾島中之地基共計四千九百坪一坪每方
二米突

所有地基租額定以每年銀貨八拾圓完納朝鮮政府即

自換約之日起算於日本公使館每屆陽曆十二月十五

日先將明年租額交附統理衙門查收爰立約草附地

圖以明憑信

大朝鮮開國四百九十九年十二月十二日

督辦交涉通商事務 閣

種默

閣種
默印

大日本明治二十四年一月二十一日

代理公使

近藤真鋤

近藤
真鋤

(別紙地圖略之)

外務省

大日本朝鮮兩國盟約

大日本朝鮮兩國政府ハ朝鮮曆明治二十七年七月廿五日
ニ於テ朝鮮國政府ヨリ清兵撤退一節ヲ以テ朝鮮國
京城駐在 日本特命全權公使ニ委託シテ代辦セシメ
タル以來兩國政府ハ清國ニ對シ既ニ攻守相助ケル
ノ位地ニ立テリ就テハ其實ヲ明著ニシ併ニ兩國
事ヲ共ニスルノ目的ヲ達センカ為メ下ニ記名セル
兩國大臣ハ各々全權委任ヲ奉シ訂約シタル條款左
ニ開列ス

第一條

此盟約ハ清兵ヲ朝鮮國ノ境外ニ撤退セシメ朝鮮
國ノ獨立自主ヲ鞏固ニシ日朝兩國ノ利益ヲ増進
スルヲ以テ目的トス

第二條

日本國ハ清國ニ對シ攻守ノ戰爭ニ任シ朝鮮國ハ
日兵ノ進退及其糧食準備ノ為メ及ッ犬々便宜ヲ
與フヘシ

第三條

此盟約ハ清國ニ對シ平和條約ノ成ルヲ待テ廢罷
スヘシ

此レカ為メ兩國全權大臣記名調印シ以テ憑信ヲ昭
ニス

大日本國明治二十七年八月廿日 特命全權公使大島圭介
大朝鮮國開國五百三年七月廿日 外務大臣金允植

大朝鮮國兩國盟約

大朝鮮國政府允約於朝曆開國五百三十七年六月二十三日以朝鮮國政府將撤退清兵一事委託駐紮朝鮮國京城日本國特命全權公使代為出力亦未兩國政府之於清國既立攻守相助之地緣明著事由所繫併期克成兩國共同濟事之意於是下開兩國大臣各奉全權委任訂定條款開列于左

第一條

此盟約以撤退清兵于朝鮮國境外鞏固朝鮮國獨立自主而推充朝日兩國所享利益為本

第二條

日本國既允擔承與清國攻守爭戰朝鮮國則於日本隊伍以時進退以及預籌糧餉等諸項事宜必須襄助予使不遺餘力

第三條

此盟約俟與清國和約成日作為罷約為此兩國全權大臣記名蓋印以昭憑信

大朝鮮國開國五百三十七年七月廿六日 外務大臣 金允植
大日本國明治二十七年八月二十六日 特命全權公使 大島圭介

電信機條約

傳信機條約書

日本政府及ヒ丁球

皇帝陛下使節ト議シテ丁球國（ドイツ、ストレ、イルラスクミナ、オクヤパン、

エキスタンシユ、テレグラフスセルスカト）會社ノ傳信機ヲ日本地

方ニ陸揚スル免許ノ約定

第一條

丁球國（ドイツ、ストレ、イルラスクミナ、オクヤパン、エキスタンシユ、テレグラフスセルスカト）

會社ノ海中傳信機ヲ大日本國横浜長崎兩開港ニ於

テ陸揚シ且海中ハ九州四國ノ南方ヲ廻リ其海底線

ヲ右兩港ト相接セシムル事ニ付日本政府右會社ニ

允准セリ

第二條

外務省

長崎横浜ニテ右傳信機取設方ノ用意ヲナシ且其局

ヲ建ルタソ會社ニテ要用ノ地ヲ借得ヘシ尤モ兩港

ノ日本官府ヨリ差支ナキ地ヲ指示シ可成文々海濱

ニ切近ニテ其局ヲ建シ且其機線ヲ地上ニ導ク為

メ緊要ナルノ外之ヲ最モ短クスヘシ

第三條

傳信局其外建物ノ為借受タル地及傳信用ノ品物ノ

條約面ニ從フテ之ヲ拂フヘシ

第四條

會社ノ機線損スルト雖モ日本政府其責ヲ受ヘカラ

ス然シ日本政府ニテ右陸上ノ線及柱ヲ自國所持ノ

線及柱同様ニ防護スヘシ且從來傳信機ヲ損スル事

ニ付布告セシ刑律ハ日本領内ノ水陸ニアル丁球會

社傳信機ニアリテモ同般ニ行ハルヘシ

第五條

日本人若シ日本領内ノ水陸ニ在ル丁株会社傳信機ヲ損スルモノアリテ其証拠明白ナレハ会社其者ヨリ其償ヲ得ルカ為メ訴出ルノ理アルヘシ

第六條

会社ニテ使役スルモノハ各其本國ノ戸籍ニ列セルモノニシテ其本國ト日本トノ條約ヲ守リ且日本ノ法ヲ遵奉スヘシ

第七條

日本人民右傳信諸術ニ熟シ右ニ適用スル人物アツテ此傳信機会社ニ入シテ請トキハ之ヲ免シ且会社ノ官貨ト均シキ取扱ヲ受テ一般ノ利益ニ至ル迄他

外務省

入ト同様タルヘシ

第八條

日本政府ニテ傳信ト欲スル信ハ他ノ傳信ヨリ必先ニ送ルヘシ

第九條

日本政府ハ此度会社ニ其業ヲ管マシタル為ニ之ヲ允准セシモノナレハ只一般ノ保護ヲナスノ外其モ關係スル事ナシ而後モシ同業ヲ起サント欲スルモノアリテ之ヲ允准スル事アリトモ会社ニテ決テ苦情ヲ唱フル事アルヘカラス尤若シ日本政府他國ノ会社ニ此免許ヨリハ多ク利益ノアル免許ヲ出ス時ハ丁株ノ会社ニモ右同様ノ利益ヲ差許スヘシ

第十條

此約定海定線成就ノ年ヨリ三十年ノ間施行シ三十
年ヲ過ル時ハ合議ニテ箇條ヲ改革スヘシ

第十一條

此約書原文ハ日本語ニ通佛朗西語ニ通ヲ認ムヘシ

明治三年庚午八月廿五日

洋曆千八百七十年第九月廿日

於東京

外務卿

澤從三位清原宣嘉 花押

外務大輔

寺嶋從四位藤原宗則 全

丁珠使節

エユリーニツキ 印

外務省

26

7-0199

0151

丁株電信會社へ免許狀

千八百七十年第九月二十日日本政府ニ於テ丁株國
會社へ與ヘシ其海底線ヲ長崎ニ陸揚スルノ免許
ヲ施行セシ為今爰ニ日本政府ハ電信察へ命シ左ニ
掲ケタル箇條書ヲ以テ自國ノ電信機へ会社ノ海底
線ヲ交通スルノヲ免許スル此免許ノ期限ハ千八百
七十年免許セシ約定ノ年限ヲ期限トス

第一條

電信察及会社ニ於テ双方傳信ノ賃銀ヲ通知スヘシ
電信察ニ関スルモノハ長崎ヨリ内地各所ニ通スル
諸信ノ賃銀会社ニ関スルモノハ長崎ヨリ總テ外國
ニ達スル諸信ノ賃銀也

外務省

第二條

總テ日本ヨリ長崎會社線上ニテ海外へ傳ヘル信ハ電
電信察ノ線ノミナラス海外届先マテノ總賃銀ヲ取
立テ海外線ノ各ハ会社へ渡スヘシ素ヨリ海外張
ノ傳送ハ会社其責ニ任シ電信察ハ日本國內傳送ノ
責ヲ任スヘシ会社モ海外ヨリ來ル信ハ長崎ヨリ日
本國內届先迄ノ賃銀ヲ電信察へ引渡スヘシ

第三條

双方ノ會計ハ長崎ニ於テ之ヲ為スヘシ
内外互ニ交換スル信報ハ長崎ノ兩局ニ於テ別ニ會
計ノ簿籍ヲ作り之ヲ記載スヘシ内外互ニ交換スル
信報ノ内合社ヨリ電信察線上ノ傳送賃銀總高ハ電
信察會計ニ立置キ合社線上ニテ外國ヨリ日本マテ

及長崎ヨリ外國届先マテ傳送ノ賃銀ハ会社ノ會計ニ立置キ毎月双方ノ局ニ於テ其勘定ヲ示シ合ヒ差引ヲナシ互ニ之ヲ拂フヘシ

第四條

電信寮ハ電信局ヲ会社ノ局内ニ取設ケ其借料ハ双方納得ノ上取極ノ電信寮ヨリ相払フヘシ
若シ又電信寮ニテ他所ニ局ヲ設ル時ハ別線ヲ増加シ各國通信ノ妨ヲナサ、ルヘシ

第五條

電信ノ賃銀及是ニ關スル事務章程ヲ定ル等ノ事ハ双方勝手タルヘシ

然レモ海外各國トノ通信ニハ萬國電信ノ公法ニ從フヘシ
最初巴里斷ニテ取極ニ後、維也納并ニ羅馬ニテ改正セシ定則

外務省

第六條

會社ニテ用ル所ノ漢字ヲ以テ認メタル電信技術ヲ電信寮ニ採用スヘシ

第七條

音信ノ序言且ツ電信寮並電信寮会社間ノ局報モ總テ英語ヲ用ユヘシ

一千八百七十四年第三月九日

於哥卑合給

大北電信会社社長上席

チーキン (手記)

明治六年十二月二十七日

西曆一千八百七十三年十二月廿七日

於東京

工部省分局電信寮

電信頭從五位石丸安世(印)

加判

電信權正正六位石井忠亮

外務省

長崎電信局新設條約

長崎ニ於テ双方ノ新局取設ノ義ニ付大日本政府電信寮ト大北部電信会社トノ定約書

一 日本政府電信寮ト大北部電信会社ハ長崎外國居留地内ニ在ル第一番地ト第二番地ノ兩地所ニ於テ各々双方ノ新局ヲ取設クヘシ

一 萬國音信往復ノ為メ一モ電線ヲ以テ兩局ヲ聯續セストモ日本ト海外各所間ノ電報ハ協議堂ニ於テ自他互ニ交換スヘシ

右協議堂ニ於テハ双方トモ勝手ニ出入スルコトヲ且双方間ノ諸會計ハ此堂内ニ於テ結算ス可シ

外務省

一 双方ノ内誰ヨリニテモ上文ノ地所ヨリ移轉スル際ニ於テハ其移轉前ニ移轉スル者ノ方ヨリ其新局ト移轉セサル方ノ局トノ間ニ萬國音信往復ノ為メ電線ヲ備設シ而シテ轉局ノ上ハ其電線ノ守成修繕將々其線兩端ノ取扱モ移轉ノ者ヨリ相弁ス可シ

其際ニ於テハ移轉スル者ノ方ヨリ他方ノ局内ニ取設タル役室ノ借賃ヲ拂フヘシ

一 最便ナル方法ヲ以テ兩局ヲ廊底ニテ結合ス可シ蓋シ之ヲ造ルニハ保災会社ニテ兼引スヘキ財物ヲ以テシ双方各々其自己ノ地所境迄ノ入費ヲ拂フヘシ

此廊底ハ会社局内ノ協議堂ニ通ス此堂ハ双方ノ会合所ナリ

日本政府ノ電信寮ハ此室ノ借賃若シクハ用片料トシテ一切私入レサルナリ

一 双方共互ニ何時ニテモ自他ノ局内ニ出入スルヲ勝手タルヘシ

自他線上ニ往復スル音信ノ計數ハ双方監督長ニテ手記調印スヘシ

一 一千八百七十三年六月十月ニ於テ大北部電信会社へ准允アリシ免許狀ノ第四條中ノ文辭ヲ

變セシ者ト雖モ此定約肩ノ故ヲ以テ本免許狀ヲ決シテ變換セサル一ハ判然トシテ言ヲ俟タス

右ヲ証明スル為ニ双方手記調印スル者也

外務省

大北部電信会社支那日本大系理人

一千八百七十四年六月十五日於上海

テライエール 手記



一千八百七十四年七月一日於東京

電信權頭正六位石井忠亮



別紙

上文ノ定約書ニ追加條

一 兩局間ニ交換スル音信中ニ書寫不明ノ義アラハ之ヲ了誦スル能ハサル方ヨリ来テ之レヲ受信セシ他局ノ技術ニ尋問スヘシ

一月未勘定書ノ調印ハ隔月自他ノ局内ニ於テ之ヲ整フヘシ

双方ノ監督長ニテ之ヲ協議堂内ニ於テスル

「兼諾セハ其通り之ヲ行フトモ妨ケナシト

ス

千八百七十四年七月一日於横浜

大北部電信會社弁理人代理

ニエルトツ

手記

外務省

電信權頭正六位石井忠亮

34

電信料私渡約定

日本帝國政府ノ代理タル電信局長芳川顯正ト大
北郵電信会社ノ代理タル日本支那間ノ同会社總
管事「ジヨルジゼ」ヘルランドトノ間ニ約定ス則チ左ノ如シ

第一章

西曆一千八百七十八年三月廿五日ヨリ日本政府ハ
其電信各各局ニ於テ一ヶ月中ニ徵收セル海外電信
税ノ会社ニ私フヘキ金額ヲ其月末毎ニ為替手形ト
ナシ上海總管事ニ宛テ之ヲ滙送スヘシ左ノ二
項ノ合計高ハ引去リ其殘餘ヲ上海ヘ廻金スヘシ
会社ヨリ政府線上傳通ノタメ電報ヲ交附シ其
税トシテ政府ニ私フヘキ金額
在長崎會社管事ノ請求ニ應シ私渡ス金額

外務省

但シ一ヶ月ノ渡高墨銀一千五百弗ヲ以テ限トス

右回金方ハ東洋銀行ノ為替手形ニテ墨銀ト上海西
銀トノ其時相場ヲ以テ算當シタル者ヲ滙送スヘシ

第二章

西曆一千八百七十八年三月廿五日ヨリ長崎ニテノ
電報取扱方ハ總テ政府ニ於テ支配スヘシ其箇條左
ノ如シ

日本帝國ノ内ヘカ或ハ帝國ノ外ヘ宛タル電報信
ハ直ニ賴信人ヨリ之ヲ受付スヘシ日本帝國ノ
内ヨリ欲或ハ帝國ノ外ヨリ長崎ニ着信スルモ
ノハ總テ政府局ヨリ直ニ受信人ヘ之ヲ配達ス
ヘシ
賴信人ヨリ受付シタル海外行電報ハ速ニ之ヲ

会社へ交附シテ其傳送ヲ為サシムヘシ之ニ及
シテ海外ヨリ會社へ着達シタル電報ハ速ニ之
ヲ政府局ニ交付シ其配達ヲ為サシムヘシ
諸勸定ハ毎日政府局負及ヒ会社負ニテ互ニ之ヲ調
査整合スヘキコトハ既ニ双方ニ於テ兼知セル者ナ
リ

第三章

日本政府ハ西曆一千八百七十八年三月二十五日以
後一ケ年間會社ノ役負「フレデリックウイグナル
者ヲ雇入レル」ヲ約ス且日本銀貨二百五十拾円ツハ
月々同人ニ給與シ而シテ家具ナキ相当ノ居室ヲ與フ
ヘシ若シ此居室ヲ與ヘサルトキハ其代價トシテ日
本銀貨三十五円ツハ毎月附與スヘキモノトス

外務省

右後証ノ為ニ双方茲ニ手記ス

於東京一千八百七十八年三月二十三日

芳川 顯正 手記

右証人

イ、ギルヘルト 手記

於東京一千七十八年三月二十三日

シヨルジ、ゼヘルランド 手記

右証人

ゼームスステワルド 手記

日本通信省及獨逸郵政省間ニ締結セル小包郵便物
交換約定

日本通信大臣及獨逸郵政長官ハ日本獨逸間小包郵
便物ノ交換業務開設ニ関シ左ノ條項ヲ約定ス

第一條

日本及獨逸兩郵政廳間ニ小包郵便物ノ交換業務ヲ
開設シ兩國相互ニ小包郵便物ノ發送ヲナスヘシ但
價額表記ノ小包ハ之ヲ發送スルコトヲ得ス

第二條

小包郵便物ノ大サ及重量ハ左ノ制限ヲ超過スルコ
トヲ得ス

大サ 幅 高 六十「センチメートル」
重量 五「キログラム」

外務省

第三條

西郵政廳ノ間ニ交換スル小包郵便物ノ海運ニハ獨
逸郵政廳ニ於テ日本獨逸間定期航海ノ北獨逸「ロイド」
ノ汽船ヲ使用スヘシ

第四條

第一 小包郵便物ノ郵便料ハ差出人ニ於テ之ヲ前
納スヘシ

第二 日本ヨリ獨逸ニ送ル小包郵便物ハ其ノ重量ノ輕
重ニ拘ラス左ノ料金分割額ヲ合算シタルモ

一 獨逸領收込 五十「サンキーム」
一 海上運送料 三「フランク」

一 獨逸領收込 五十「サンキーム」

一 海上運送料 三「フランク」

一日本領收分

ニフランク

合計五「フランク」五十「サンチム」

第三 兩郵政廳ハ前記ノ割合ニ依リ各其ノ領收ス

ヘキ各ヲ受領スヘシ

第五條

第一 小包郵便物ノ差出入ハ二十五「サンチム」以

内ノ料金ヲ前納スルトキハ其到達証ヲ受領

スルコトヲ得

第二 此料金ハ全部差立國郵政廳ノ收入ニ歸スル

モノトス

第六條

名宛國ハ小包郵便物ノ配達料及税関ニ於ケル諸手

續執行料トシテ一箇ニ付合計二十五「サンチム」以

外務省

内ノ料金ヲ名宛人ヨリ徴收スルコトヲ得

第七條

郵便手数料ニ對スル兩國貨幣ノ相当金額ハ本約定

第十九條ニ所謂實施細目規則ヲ以テ之ヲ定ムヘシ

第八條

第一 名宛國ニ於テ名宛人ニ配達スルコト能ハサ

ル小包郵便物ハ差立國ニ返送シ此ニ屬スル

總テノ郵便手数料ハ差出人ヨリ徴收スヘシ

第二 誤小包ヲ差出人ニ還付シ能ハサルトキハ之

ヲ返送シタル國ニ其旨ヲ通報スヘシ此場合

ニ於テハ郵便手数料ハ兩郵政廳互ニ之ヲ計

算セス

第九條

兩郵政廳ハ第四條第五條及第六條ニ規定セルモノ
、外小包郵便物ニ関シ郵便手数料ヲ徴收スルコト
ヲ得ス

第十條

信書若クハ通信文ノ性質ヲ有スル書類又ハ税関ニ
関スル法令若クハ其他ノ法令ヲ以テ滯送ヲ計サ、
ル物品ヲ包有スル小包ハ郵便ニ依リ之ヲ發送スル
ヲ禁ス

第十一條

小包郵便物ハ関税徴收ノ為メ税関ノ検査又
ハ開包ヲ受テヘシ

第十二條 名宛國ニ於テ支拂フヘキ関税ハ名宛人ヨリ
之ヲ徴收スヘシ

外務省

第十二條

第十三條 名宛人ニ於テ小包郵便物ニ課スヘキ関税及
料金ノ納付ヲ拒ムトキハ其郵便物ヲ受領ス
ルコトヲ得ス

第十四條 前項ノ規定ハ配達ヲナスコト能ハスニテ差
出人ニ逐付ノ為メ送セラレタル小包郵便
物ニ付テモ亦之ヲ通用ス

第十三條

第十五條 小包郵便物ノモ失又ハ損傷ニ對シ差出人又
ハ差出人不在ナルトキ若クハ差出人ノ請求
アルトキハ名宛人ヨリ其ノモ失又ハ損傷セ
シ實額ニ相当スル賠償ヲ請求スルコトヲ得
但其ノ賠償ハ小包ノ重量三キログラム迄ハ

十五「フ」ラニク「三」キ「ロ」ケ「ラ」以上ハ二十五「フ」
ラニク「ヨ」超過スルコトヲ得ス亡失シタル小
包ノ差出入ハ尚其發送費ノ返還ヲ請求スル
コトヲ得

第二 左ノ場合ニ於ケル損害ニ對シテハ賠償ノ責
ナシ
一 不可抗力ニ因ルトキ
二 物品自己ノ性質又差出人自己ノ不注意ニ
因ルトキ

第十四條

第一 賠償金支拂ノ義務ハ差立局ヲ管理スル郵政
廳之ヲ負擔ス但シ名宛國郵政廳ノ管掌中ニ
於テ亡失又ハ損傷ノ事實ヲ生ニタルモノナ

外務省

ルトキハ差立國郵政廳ヨリ名宛國郵政廳ニ
對シ賠償ヲ為スノ權ヲ失フコトナシ

第二 小包郵便物ヲ異議ナク受領シタル後之ヲ名
宛人ニ交付シタルコト若クハ一方ノ郵政廳
ハ正当ニ交付シタルコトヲ証明スル能ハサ
ル郵政廳ハ又對テ証明スル迄ハ責任ヲ有ス
ルモノトス

第三 差立國郵政廳ハ成ルヘク速ニ賠償金ヲ支払
フヘシ遲クモ賠償請求ノ日ヨリ起算シ一箇
年ヲ超過スヘカラス名宛國郵政廳ニ於テ責
任ヲ有スルトキハ差立國郵政廳ニ對シ速ニ
其ノ賠償金額ヲ還付スヘシ

第十五條

40

郵政廳ハ受取權利者ニ於テ小包郵便物ヲ受領セシ
後ハ其ノ責ヲ免ル、モノトス

第千六條

賠償ノ請求ハ小包郵便物ヲ差出シタル日ヨリ起算
シ一箇年以内ニ限リ之ヲ受理ス此期限経過ノ後ハ
差出人ハ何等ノ賠償ヲモ請求スルコトヲ得ス

第千七條

各郵政廳ハ小包郵便物ノ交換業務ヲ停止スルヲ以
テ相当ナリト認ムル非常ノ場合ニ於テハ一時其ノ
全部又ハ一部ヲ停止スルコトヲ得但此場合ニ於テ
ハ直ニ他ノ郵政廳ニ通知スヘシ

第千八條

此約定中明文ナキ事項ニ就テハ兩國ノ内國小包郵
便事務ニ関スル諸規則ノ適用ヲ妨ケス

外務省

第千九條

本約定ノ實行ヲ確保スル為ニ要用ナル實施細目規
則ハ別ニ日本通信省及獨逸郵政省之ヲ定ムルモノ
トス

第千十條

本約定ハ明治二十八年一月一日(千八百九十五年一
月一日)ヨリ實行シ左ノ場合ニ於テ其効力ヲ失フモ
ノトス

第一 兩郵政廳ノ一方ヨリ一箇年前ニ解約ノ通

知ヲナシタルトキ

第二 日本帝國政府カ萬國郵便小包交換條約ニ

加入シ之ヲ實施シタルトキ

本書二通ヲ調製シ

東京明治二十七年七月二十一日

伯林千八百九十四年九月二十六日

日本逓信大臣 黒田清隆

獨逸郵政長官 ステファン

外務省

42

7-0199

0165

日本帝國遞信省ト加那太國郵政廳トノ間ニ取結ヒタル郵便為換規約

第一條

日本帝國ト加那太國トノ間ニ郵便ヲ以テ為換ヲ執行スヘシ

第二條

為換金ハ双方共加那太貨幣ヲ以テ記載スヘシ但兩國ノ間貨幣ノ相場ニ時々昇降アルカ為メ日本遞信省ハ適當ノ割合ヲ以テ為換金ヲ引直スヘキコトヲ茲ニ約束ス即チ加那太ハ為換ヲ取組ム為メ日本遞信省ニ於テ受領シタル金額ハ為換ヲ振出ス時ノ相場ヲ以テ加那太貨幣ニ引直シ又日本ニテ拂渡ス為メ加那太ヨリ振出シタル為替ノ金額ハ日本遞信省ニ於テ為替目録ノ到達シタル日ノ相場ヲ以テ日本貨幣ニ引直スヘシ

第三條

為替一口ノ金額ハ双方共五拾弗ヲ超過スヘカラス

第四條

尙未滿ノ端數金額ハ為換トナスヘカラス

第五條

為換金額ハ差出入ヨリ拂込ミ並ニ受取人ニ拂渡シ共金貸又ハ金貸ト同様ノ價アル他ノ通貨タルヘシ若シ兩國ノ一ニ於テ金貸ヨリ低價ナル紙幣ヲ通貨トシテ使用スルトキハ該國ノ郵政廳ハ其紙幣ヲ以テ人民ト為換ノ受拂ヲナスコトヲ得但相場ノ差異ヲ隨テ計算ヲナスヘシ

外務省

第六條

日本逋信省並ニ加那太郵政廳ハ双方共其振出ス為
換手教料ノ割合ヲ時々更正スルノ權ヲ有ス此手教
料ハ振出局ノ收入トス但日本逋信省ハ日本ヨリ振
出シ加那太ニ於テ辨渡スヘキ為換金總額ノ千分ノ
五ノ歩合金ヲ加那太郵政廳ニ辨ヒ加那太郵政廳ハ
加那太ヨリ振出シ日本ニ於テ辨渡スヘキ為換金總
額ヨリ前同様ノ歩合金ヲ日本逋信省ヘ辨フヘシ

第七條

為換ハ差出人及ヒ受取人ノ氏名住所又差出人若ク
ハ受取人會社組合ナレハ其名號及ヒ住所ヲ差出人
ヨリ申立ツルニ非レハ之ヲ振出サハルヘシ但差出
人若クハ受取人ノ名稱ヲ差出人ヨリ一層詳細ニ陳
述セル場合ニ於テハ其陳述スル通りヲ為換目錄ニ
記載スヘシ

外務省

第八條

兩國間郵便為換ノ事務ハ總テ交換局ヲ經テ之ヲ取
扱フヘシ日本ニ於テハ東京ヲ以テ交換局ト定メ加
那太ニ於テハ英領「エロ」州「グ」州ヲ以
テ交換局ト定ムヘシ

第九條

加那太ヨリ日本ヘ振出シタル為換ノ要件ハ「グ」州
トリア「交換局」ニ於テ附録甲號雜形ニ因テ調製セシ
目錄ニ記入シ且其金額ハ一々加那太貨幣ニテ之ヲ
登記シ「グ」州トリア「日付印」ヲ押シ東京逋信省(外
信局)ヘ遞送スヘシ該局ハ之ニ日付印ヲ押シ私渡ノ

44



手續ヲナスヘシ

日本ヨリ加那太へ振出シタル為換ノ要件モ前同様ノ手續ヲ以テ東京逋信省(外信局)ニ於テ附録乙號雜形ニ因テ調製シタル目録へ記入シ且ツ其金額ハ一々兩國ノ貨幣ニテ之ヲ登記シ其局ノ日付印ヲ押シガ井タトリア「交換局へ逋送スヘシ該局ハ之ニ日付印ヲ押シ辨渡ノ手續ヲナスヘシ

目録及ヒ目録中記載ノ件々ハ差立ノ順序ニ從ヒ永久番號ヲ付シ且ツ甲國ノ目録乙國ニ達スルトキハ乙國ハ其後初ノテ逋送スヘキ目録中ニ甲國ノ目録領收ノ音ヲ記載スヘシ

前記目録ハ兩國互ニ報知スヘキ為換アル時ノミニ限リ送付スヘシ且ツ目録ノ紛失等ヨリ不都合ノ生

外務省

セサル為ノ兩國互ニ次便ヲ以テ前便逋送セシ目録ノ副書ヲ送致スヘシ

毎年六月三十日ニ終ル一期間一期間トハ一年期ニ分タル其二三箇月ツ四ヲ指ス以下同之加

那太ニ於テ振出シ六月三十日迄ニ至リ「ガ井タトリ

」交換局へ到達セル為換ハ六月中最後ニ逋送スヘ

キ目録ノ補款目録ニ記入スヘシ又同期間日本ニ於

テ振出シ六月三十日迄ニ至リ東京交換局ニ到達セ

ル為替モ同様六月中最後ニ逋送スヘキ目録ノ補款

目録ニ記入スヘシ

第十條

差立局ノ目録受取交換局へ到達次第該局ニ於テ目録ニ照シ受取人へ宛内國為換ヲ振出シ内國為替規則ニ隨ヒ之ヲ無税ニテ受取人或ハ辨渡局へ配達ス

一シ
目錄中受取交換局ニ於テ改正ニ難キ誤謬アルトキハ差立局へ照會シ其説明ヲ請フヘシ差立局ハ可成犬々速ニ之ニ應スヘシ尤モ右誤謬アル為替ハ其照會中内國辨渡為替ノ振出ヲ停止スヘシ
為替目錄ハ一通ツ、受取交換局ヨリ差出交換局へ返還スヘシ尤モ其返還前受取交換局ニ於テ目錄ニ記載ノ為替松渡局ノ名ヲ記入スヘシ且ツ日本ヨリ返還スル和那太目錄ハ日本通信省ニ於テ引直シタル割合ニ依リ日本貨幣ヲ以テ為替金額ヲ一々記入スヘシ

第十一條

甲國ヨリ乙國ニ向ケ振出シタル為替ノ辨渡方ハ都々辨渡國ノ内國為替規則ニ隨ヒ取扱フヘシ
辨濟證書ハ双方共其金額ヲ辨渡シタル國ニ保存スヘシ

外務省

第十二條

為替受取人若クハ差出人ノ氏名ニ誤謬アリテ其改正ヲ要シ或ハ差出人ニ於テ為替金ノ辨渡ヲ請願セシトスルトキハ差出人ヨリ其為替ヲ振出セシ國ノ郵政廳へ申立ツヘシ
再度ノ為替ハ初度ノ為替振宛局ノ郵政廳ニ限リ之ヲ振出シ其手續ハ都テ其國ニ於テ既ニ制定シ又ハ新ニ制定スヘキ規則ニ隨フヘシ

第十三條

為替ハ初度ノ振出シト再度ノ振出シトヲ論セス辨



渡國ニ於テ未タ其為替金ヲ松渡サス且ツ松渡サ、
ル旨ヲ松渡國ノ郵政廳ヨリ通知アリテ其旨ヲ証明
シタル後ニ非レハ振出國ニ於テ之ヲ差出入ニ松戻
サ、ルヘシ

第十四條

為替ハ振出シタル月日ヨリ十二箇月間ニ受取ラサレ
ハ其効用ヲ失ヒ其金額ハ振出國ニ屬シ其處分ニ任
スヘシ故ニ日本通信省ハ加那太ヨリ受取タル目錄
中ノ為替ニテ右ニ定メタル期限中松渡サ、ルモノ
ハ加那太ノ貸金トシテ每一期間ノ計算書中ニ記入
スヘシ

又加那太郵政廳ハ日本通信省每一期間計算書ニ記
載ノ為ノ誤局ヨリ到達セル目錄中為替金ノ本條ニ
因リ効用ヲ失ヒタルモノヲ記載シタル明細書ヲ每
月未遡送スヘシ

外務省

第十五條

每一期間ノ未ニ於テ日本通信省ハ該期中兩國ヨリ
振出シタル為替ノ詳細ヲ記スル各目錄ノ總額及ヒ
右ヨリ生スル差引残額ヲ示ス所ノ計算書ヲ調製ス
ヘシ

右計算書二通ヲ在オツタ府加那太郵政廳へ送達
シ其差引残額ハ証明ノ上日本通信省借方トナルト
キハ計算書ヲ送付スルト同時ニ「ウヨルク」宛加
那太貨幣ヲ以テ任払ヲナシ又加那太郵政廳借方ト
ナルトキハ計算書ノ寫ヲ送付スルト同時ニ加那太
貨幣ヲ以テ當時ノ相場ニ依リ買得ヘキ文ケノ日本

通貨ヲ買入レ横濱宛銀行為替券ヲ以テ支拂フヘシ
此每一期間計美書用紙ハ附録丙丁及戊號ノ雜形ニ
依ルヘシ
計美決定前日本逋信省及ヒ加那太郵政廳ノ中一方
ヨリ他方ヘ對シ五千冊餘ノ殘額ヲ生スルトキハ速
ニ右殘額ノ見積高ヲ拵フヘシ

第十六條

日本逋信大臣及加那太郵政長官ハ前規約ノ旨趣ニ
抵觸スルニ非サレハ詐偽ヲ防キ或ハ一般ニ為換ノ
事業ヲ改良スヘキ目的ヲ以テ新ニ條目ヲ増設スル
ノ權アルヘシ但甲國ニテ増加セシ條目ハ之ヲ乙國
郵政廳ヘ通知スヘシ

第十七條

日本若クハ加那太商人ノ此為替ヲ以テ金負ヲ逋送
スルモノ夥多ニシテ隨テ其金負巨額ニ至ルトキハ
日本逋信省若クハ加那太郵政廳ハ適宜ニ其手数料
ヲ増加シ若クハ一時全ク其振出ヲ停止スルノ權ア
ルヘシ

第十八條

此規約ハ明治二十二年十月一日即チ千八百八十九
年十月一日ヨリ實施シ甲國ヨリ乙國ヘ廢止ノ報知
ヲナシタル日ヨリ十二箇月間効力ヲ有スヘシ
此規約ハ二通ヲ製シ一通ハ明治二十二年五月十六
日東京ニ於テ記名認印シ又一通ハ一千八百八十九
年六月二十七日「オツタワ」ニ於テ記名認印スルモノ
ナリ

外務省

日本帝國逓信大臣 後藤 象二郎
加那太郵政長官 ジョーン・ハッガード

外務省

7-0199

0172

大日本帝國遞信省ト大貌列顛郵政院トノ間ニ締結セル改正郵便為替定約

大日本帝國遞信省及大貌列顛郵政院ハ兩國間ノ現行為替法ヲ改正センコトヲ希望シ末尾ニ記名セル者ハ各其政府ノ命令ニ依リ左ノ條々ヲ締結セリ

第一條

大日本帝國及大貌列顛トノ間ニ每週郵便為替ノ交換ヲ執行スヘシ

第二條

此締盟兩國間ノ為替事務ハ總テ交換局ヲ經テ之ヲ取扱フヘシ日本ニ於テハ東京ヲ以テ交換局ト定メ英國ニ於テハ倫敦ヲ以テ交換局ト定ムヘシ

第三條

外 務 省

凡ソ為替金類ハ雙方トモ英貨(ステルリング)ヲ以テ記載スヘシ而シテ此兩國間ノ貨幣相場ニ時々昇降アルカ為ニ日本遞信省ハ適當ノ割合ヲ以テ為替金類ヲ引直シ得ルコトヲ約ス即チ英國ニ為替ヲ振出ス為日本遞信省ニ於テ受領シタル金類ハ時ノ貨幣相場ヲ以テ英貨ニ引直シ又英國ヨリ振出シタル為替ノ金類ハ日本遞信省ニ於テ之ヲ払渡ス前日本貨幣ニ引直スヘシ

第四條

兩國間ニ振出シ得ル為替金類ハ一口十ポンドヲ超過スヘカラス

「ポンド」以下ノ端數ハ為替トナスヲ得ス

第五條

49

公衆ニ為替ヲ拂渡スニ方リ銀貨相場ノ昇降ヨリ
高ニ異同ヲ生セサラシメシカ為替金ハ總テ金貨
若クハ金貨ニ最近ノ價格ヲ以テ之ヲ払渡スヘシ

第六條

日本逓信省及英國郵政院ハ双方共其振出ス為替料
ノ割合ヲ時々更定スルヲ得ヘシ

其為替料ハ總テ振出局ノ收入ニ歸スルモノトス但
日本逓信省ハ日本ヨリ振出シ英國ニ於テ拂渡シタ
ル為替金總額ノ千分ノ五ノ歩合金ヲ英國ノ郵政院
ニ支拂フヘシ又英國郵政院ハ英國ヨリ振出シ日本
ニ於テ拂渡シタル為替金總額ノ前同様ノ歩合金ヲ
日本逓信省ニ支払フヘシ

第七條

外務省

為替ハ其請求者ヨリ差出人ノ氏名及受取人ノ宿所
氏名又會社組合差出人ナレハ其名號受取人ナレハ
其名號所在ヲ詳述スルニ非レハ之ヲ振出サハルヘ
シ但其請求者ヨリ差出人及受取人ノ名稱ヲ一層詳
細ニ陳述セルトキハ其陳述スル通り通知スヘシ

第八條

為替證書、不達紛失或ハ破損シタル場合ニ於テ其受
取人ヨリ緊要ナル條件ヲ書面ニ認メ為替払渡國ノ
為替本局ニ再度ノ為替證書ヲ請求スルトキハ之ヲ
交付スヘシ此場合ニ於テ該局ハ再度ノ為替料ヲ要
求スルヲ得但シ郵便遞送中ニ證書ヲ紛失シタルト
キハ此限ニアラス

第九條

受取人ヨリ緊要ノ條件ヲ認メ為替拂渡ノ停止ヲ請
求スルトキハ其私渡ヲ停止スヘシ

第十條

為替受取人若ハ差出人ノ氏名ニ誤謬アリテ其改正
ヲ要シ或ハ差出人ニ於テ為替金額ノ拂戻ヲ請求セ
ントスルトキハ差出人ヨリ其為替振出國ノ為替本
局へ申立ツヘシ此場合ニ於テハ該局ハ再度ノ手数
料ヲ要求スルヲ得但為替取扱吏員ノ過誤ニ起因ス
ルモノハ此限ニアラス

第十一條

為替金ハ初度ノ振出ト再度ノ振出シトヲ論セズ拂
渡國ノ為替本局ニ於テ未タ之ヲ拂渡サ、ルコトヲ
証明シタル後ニアラサレハ振出國ニ於テ之ヲ差出
人ニ私戻サ、ルヘシ

第十二條

為替ハ双方振出シタル月ノ翌月ヨリ十二箇月間其
効力ヲ有スルモノトス
右期限經過前ニ拂渡サ、ル為替金ハ總テ其振出國
ノ所得ニ歸スヘシ

第十三條

為替交換局ハ各自ノ國ニ於テ先方へ拂渡ノ為受取
リタル為替金額ヲ毎週ノ郵便ヲ以テ互ニ通知スヘ
シ但此場合ニハ目錄甲類雜形ヲ用フヘシ
通知スヘキ為替ノ振出ナキ場合ニ於テハ郵便空白
ノ目錄ヲ送付スヘシ
目錄本書ノ終失ヨリ不都合ヲ生セサラシメシカ為

外務省

兩局互ニ次便ヲ以テ前便ニ遞送シタル目錄ノ副本ヲ送付スヘシ

第十四條

目錄ニ記入スル為替ニハ外國為替番号ト稱スル特殊ノ番号ヲ付シ毎月第一号ヨリ始ムヘシ目錄ハ其差立ノ順序ニ從ヒ第一第二第三等ノ番号ヲ附シ毎年第一号ヨリ始ムヘシ

第十五條

為替目錄領收ノ旨ハ双方共領收後始メテ遞送スヘキ目錄中ニ記入スヘシ而シテ受取交換局ニ目錄違セサルトキハ直ニ其差立局ニ請求スヘシ此ノ如キ場合ニ於テハ差立交換局ハ遲滞ナク目錄副本ヲ新製シテ其正当ハモノタルコトヲ証明シ之ヲ受取交換局ニ送附スヘシ

外務省

第十六條

為替目錄ハ其受取交換局ニ於テ丁寧ニ之ヲ査閲シ其誤謬ノ明白ナルモノハ之ヲ訂正スヘシ而シテ其校正ノ點ハ校正セシ目錄受領書ニ記載シテ之ヲ差立交換局ニ通知スヘシ
其他目錄中不正ノ記入アルトキハ受取交換局ハ差立交換局ニ對シ説明ヲ求ムヘシ而シテ差立局ハ可成速ニ之ニ應スヘシ尤モ右誤謬アル為替ハ其照会中内國私渡為替ノ振出ヲ停止スヘシ

第十七條

為替目錄ノ受取交換局ニ到達次第該局ニ於テ目錄ニ照ラシ受取人ハ元私渡國ノ貨幣ニテ相当ノ金額

ニ對スル内國為換辨渡規則ニ從ヒ受取人若クハ私
渡局ニ送付スヘシ

第十八條

日本ヨリ一箇月毎ノ目錄ヲ差五次第日本遞信省ハ
附録乙丙及丁号表ニ從テ月次總計表ヲ調製シ而シ
テ丁号表ノ半面ニハ同月間日本ヨリ發セシ各目錄
ノ總金額ト此定約第六條ニ定メタル千分ノ五ノ步
合金並ニ同月間英國ニテ払戻スヘキ為替金額及沒
收(第十二條)ノ為替金額トヲ以テ英國債高トシテ之
ヲ記入スヘシ

外 省

又他ノ半面ニハ同月間英國ヨリ受取リタル各目錄
ノ總金額ト此定約第六條ニ定メタル千分ノ五ノ步
合金並ニ同月間日本ニテ拂戻スヘキ為替金額及沒
收(第十二條)ノ為替金額トヲ以テ日本ノ債高トシテ
之ヲ記入スヘシ

右ノ對美ヨリ生スル差引殘額ハ總計表差引項目部
中ニ記載スヘシ

此手續ハ毎年一月ヨリ十一月迄ノ間之ヲ履行シ十
二月各ノ月次總計表ニハ其年一月ヨリ十二月三十
一日迄ニ日本ヨリ英國ニ振出シタル為替總額ト英
國ヨリ日本ニ振出シタル為替總額トヲ合記スヘシ
其月次總計表ハ二通ヲ調製シ日本遞信省ヨリ英國
郵政院ニ送付スヘシ但其一通ハ兼諾ノ上日本遞信
省ニ送付スヘシ

第十九條

日本遞信省ヨリ總計集ノ差引殘額ヲ支拂フ下キハ

總計表ト同時ニ之ヲ滙送スヘシ又英國郵政院ヨリ
差引残額ヲ支私フトキハ總計表ノ一通ヲ返付スル
ト同時ニ之ヲ滙送スヘシ
此差引残額日本ノ貸高トナリタルトキハ東京若ハ
横濱ヘ宛又英國ノ貸高トナリタルトキハ倫敦ヘ宛
支私フヘシ但此支私ハ之ヲ受取ル國ノ貨幣ヲ用フ
ヘキモノトス

第二十條

日本逋信大臣及英國郵政院長ハ此條約ニ抵触セサ
ル限リハ詐偽防禦ノ為若ハ為替事業改良ノ為附加
條目ヲ設タルヲ得ヘシ
但甲國ニ於テ此附加條目ヲ設ケタルトキハ之ヲ乙
國ノ郵政廳ニ通知セサルヘカラス

外務省

第二十一條

日本若ハ英國ノ商人ノ此為替ヲ以テ金貨ヲ滙送ス
ルモノ夥多ニシテ隨テ其金貨巨額ニ至ルトキハ兩
國ノ郵政廳ニ於テ其為替料ヲ增加シ若ハ一時全ク
其振出ヲ停止スルヲ得ヘシ

第二十二條

此定約ハ兩國間ノ為換交換ニ関スル從前ノ諸定約
ニ代ヘ千八百九十年七月一日ヨリ實施シ甲國ヨリ
乙國ヘ廢止ノ報知ヲ為シタル日ヨリ十二箇月間効
カヲ有スヘシ
此定約ハ二通ヲ調製シ一通ハ明治二十三年五月二
十日東京ニ於テ記名調印シ一通ハ千八百九十年三
月二十一日倫敦ニ於テ記名調印スルモノナリ

大日本帝國逓信大臣
大貌列顛郵政院長

後藤象二郎
ヘンリー・セシル・レーキス

外務省

外

7-0199

0199

日本通信省ト加那太郵政廳ノ間ニ郵便ヲ以テ開囊
小包ノ交換ヲ関スル約定書

日本帝國ト英領加那太國ノ間ニ郵便事務ノ擴張ヲ
計リ冊後ニ記名スル日本通信大臣伯爵後藤象二郎
及加那太郵政長官「シオン」グラーム、ハツガードハ各
成法ヲ以テ保持スル所ノ權限ニ依リ左ノ條々ヲ約
定ス

第一條

日本ト加那太ノ間ニ郵便ヲ以テ開囊小包ノ交換ヲ
執行スヘシ

第二條

小包ハ加那太「ヴァンクローヴァ」日本横濱間ニ往復ス
ル加那太平洋汽船及汽船会社ノ汽船ヲ以テ運送
スヘシ

外務省

第三條

小包重量ノ重量ハ五封度迄トシ其大サハ長サニフ
ヒート廣サ若クハ厚サ共長フヒート迄トス

第四條

郵便税ノ割合ハ長封度若クハ其分數ニ付貳拾五仙
トス

第五條

郵便税ハ左ノ通り分配スヘシ

日本ハ陸運賃トシテ長封度ニ付八仙ヲ拂ヒ加那
太ハ海運賃トシテ九仙及陸運賃トシテ八仙ヲ拂
フヘシ

第六條

加那太郵政廳ニ於テ兩國間ニ發着スル小包ノ海運ヲ負擔スヘシ

第七條

交換スヘキ小包中ニハ兩國間郵便ニ依リ往復スル他ノ物品ニ関スル規則ヲ以テ其遞送ヲ禁ミタル物品ヲ封入スヘカラス

第八條

小包ハ封入物ノ價格ヲ公記セル税関告知書ヲ貼付スヘシ且ツ兩國ニ於テ受取タル小包ハ税関ノ法律規則ニ從フヘシ

第九條

横濱郵便局ヲ以テ日本ニ於ケル小包郵便ノ交換局トシ「ヴァンケー」郵便局ヲ以テ加那太ニ於ケル

外務省

交換局トス

第十條

小包郵便ハ小包目録書ヲ添フヘシ此目録ハ差立局ニ於テ小包ノ番号差出地名受取人ノ宛名封入物ノ公記價額及前拂タル小包差箇分ノ數而シテ其下部ニ差立タル小包ノ數及其重量ノ概計並ニ正味ヲ記入スヘシ

第十一條

小包ハ適当ニ包裝シ甲國ヨリ乙國へ送ルトキハ柳條ヲ以テ編ミタル堅固ノ籠ニ入レ發送スヘシ此ノ籠ハ加那太郵政廳ヨリ供給スヘシト雖モ日本通信省ハ其費用ノ一半ヲ任拂フヘシ

第十二條

配達ニ難キ小包ハ差出國ニ於ケル差出入ニ返還ス
ルコトヲ得ヘシ而シテ当初ニ賦課シタルト同額
ノ遞送料ヲ賦課スヘシ其遞送料ハ返還國ニ於テ前
拂ニ若クハ該小包目錄中ニ記入シ配達ノ下キニ際
ニ徴收スルコトヲ得ヘシ然レトモ返還國ニ於テ遞
送料ヲ前拂セズ差出國ニ於テ該小包ヲ差出入ニ配
達ニ難キトキハ差出國ハ其事由ヲ返還國ニ通報シ
之ニ賦課スヘキ遞送料ノ任拂勘定ヲ為スヘシ

第十三條

名宛人ニ配達ニ難キ小包ニシテ其差五人ノ發見セ
サルトキハ特別ノ定約アル場合ニ非レハ兩郵政廳
ノ間ニ照會ヲ經タル上差出國ニ返還ニ配達ニ難キ
小包トシテ取扱フヘシ

外務省

第十四條

小包ハ賦課スル遞送料ノ計算書ハ三箇月毎ニ加那
太郵政廳ニ於テ賦通ヲ調製シ審査及決算ノ為メ日
本通信省へ送付スヘシ

第十三條

此約定ハ千八百九十年十月一日ヨリ實施シ甲廳ヨ
リ乙廳へ廢止ノ報知ヲナシタル日ヨリ六箇月間ヲ
經過スル迄其効力ヲ有スヘシ
本書賦通ヲ調製シ差通ハ千八百九十年六月 日
加那太「オツタ」ニ於テ記名シ差通ハ明治二十三年
九月三日日本東京ニ於テ記名ス

日本通信大臣 伯爵後藤 象二郎
加那太郵政長官 ジオン ハツカード

千八百九十年九月三日及六月二十二日ヲ以テ帝國
通信省ト加那太郵政廳トノ間ニ締結シタル閉囊小
包郵便交換約定書ノ追加約定

日本帝國通信大臣及加那太郵政長官ハ千八百九十
年九月三日及六月二十二日日本通信省ト加那太郵
政廳トノ間ニ締結シタル閉囊小包郵便交換約定書
ヲ協議修正セシ條款左ノ如シ

第一條

前記約定書第三條中「五封度」ヲ「七封度」ト改ム

第二條

此追加約定ハ千八百九十三年二月一日ヨリ實施ス
ヘシ

本條通ヲ調製シ明治二十五年十一月九日日本東

外務省

京ニ於テ並ニ千八百九十二年十一月三十日加那太
ツタロニ於テ各記名調印スルモノナリ

日本帝國通信大臣伯爵黒田清隆

加那太郵政長官

アドルフ・ビロ・カロン

明治二十三年九月三日及千八百九十年六月二十二日ヲ以テ日本帝國逓信省ト加那太郵政廳トノ間ニ締結シタル閉囊小包郵便交換約定書ノ追加約定日本帝國逓信大臣及加那太郵政長官ハ明治二十三年九月二日及千八百九十年六月二十二日日本逓信省ト加那太郵政廳トノ間ニ締結シタル閉囊小包郵便交換約定書ヲ改議修正セシ條款左ノ如シ

第一條

前記約定書第四條中「二十五仙」ノ「二十仙」ト改ム

第二條

同約定書第五條ヲ左ノ如ク改ム

郵便税ハ左ノ通り各配スヘシ

日本ハ陸運賃トシテ一封度ニ付六仙ヲ拂ヒ加那

外務省

太ハ海運賃トシテ八仙及陸運賃トシテ六仙ヲ払

フヘシ

第三條

此追加約定ハ明治二十八年(千八百九十五年)一月一

日及千八百九十五年一月一日ヨリ實施スヘシ

本條ニ通テ調製シ明治二十七年(千八百九十四

年)九月十一日日本東京ニ於テ並ニ千八百九十

四年十月十二日加那太「オツタロ」ニ於テ各々記名

調印スルモノナリ

日本帝國逓信大臣伯爵 黒田清隆

加那太郵政長官

アドルフ・カロン

明治十七年(千八百八十四年)四月十八日及千八百八十四年三月十五日日本驛遞總官ト香港驛遞總長トノ間ニ締結シタル日本香港間郵便為替方法規約ノ修正

日本帝國逓信大臣及香港郵便長官ハ明治十七年(千八百八十四年)四月十八日及千八百八十四年三月十五日日本驛遞總官ト香港驛遞總長トノ間ニ締結シタル日本香港間郵便為替方法規約ヲ協議修正スルコト左ノ如シ

一 振出ノ日ヨリ十二箇月間ニ請求ナキ為替ハ其効用ヲ失ヒ其金額ハ振出郵政廳ニ屬シ其處存ニ在スヘシ

此修正規約ハ明治二十六年(千八百九十三年)四月一日ヨリ實施スヘシ

外務省

本書二通ヲ調製シ明治二十六年(千八百九十三年)三月三日東京ニ於テ並ニ千八百九十三年三月十三日香港ニ於テ各記名調印スルモノナリ

日本帝國逓信大臣伯爵黑田清隆
香港郵政長官代理ジ、ス、ツ、フ、オ、ル、ド、ン、モ、ド

6)

日英通商條約適用地通知

明治二十七年七月十六日締結ノ日英通商航海條約
第十九條ノ規定ニ從ヒ本月二十六日本邦駐劄英國
特命全權公使ヨリ英國殖民地ニエ、フワンドンラニ
ド及ナタルニ於テハ前記條約ノ規定ヲ適用スヘキ
旨通知アリタリ(外務省告示第二号)

外務大臣臨時代理

文部大臣 侯爵西園寺公望

外務省

62

葡萄牙政府ト締結ノ條約中領事裁判權ニ関スル條
款無効ノ件

萬延元年六月十七日葡萄牙政府ト締結シタル條約
中領事裁判權ニ関スル條款ハ自今無効ニ歸シタル
モノトス(勅令第六拾四號)

明治廿五年七月十四日

外務省

官報電信料減額取極書

露官報電信料減額取極露公使へノ往翰

下名ノ日本國皇帝陛下ノ外務卿露國皇帝陛下ノ代理公使バロニコローゼン貴下ニ告知ス兩國政府ト東京比德堡兩府ニ駐劄スル其外交官トノ間ニ往復スヘキ官報電信料ヲ減少スルコトヲ露日兩國政府間并ニ露國政府ト「グレート、ノルゼン」電信会社トノ間ニ豫メ協同ヲ遂ケ本官ハ其政府ニ代リ左ノ幾議ニ協同スルコトヲ委任セラレタリ
グレート、ノルゼン「電信会社ハ上述ノ通信料ヲ每語貳フランヲ二十五サンチームニ減スルコトヲ承諾セルカ故ニ日露兩國政府ノ右ノ通信料ヲ左ノ如ク減スルコトヲ約ス乃チ

外務省

双方各地ヨリノ通信料

A) 露國ヨリハ每語一フランヲ二十サンチーム
B) 日本ヨリハ每語五十五サンチーム
右通信料取立カハ一千八百八十三年一月一(十三)日ヨリ始ムヘシ

此約定ハ其廢止ノ期限ヲ定メシテ施行シ廢約セ
ント欲スルトキハ結約者ノ一方ヨリ廢約ノ旨ヲ届出デ
タ後六ヶ月ヲ過キタル上ニテ為スヘシ敬具

一千八百八十二年十二月十六日東京於テ

井上馨 (日記)

露國皇帝陛下ノ代理公使バロニコローゼン貴下

64

露官報電信料減額取極露公使ヨリノ来翰

(譯文)

下名之露國皇帝陛下ノ代理公使日本皇帝陛下ノ
外務卿井上馨閣下ニ告知ス「露日兩國政府間并露
國政府ト「グレート、ノルゼン」電信会社間ニ於テ「兩國
政府ト東京比徳堡兩府ニ駐劄スル其外交官トノ間ニ
往復スヘキ官報電信料ヲ減少スルコトヲ 豫メ悞同ヲ
遂ケ本官ハ其政府ニ代リ左ノ發議ニ悞同スルコトヲ
委任セラレタリ

「グレート、ノルゼン」電信会社ハ上述ノ通信料ヲ每語
貳フランク二十五サニチムニ減スルコトヲ兼諾セルカ故
ニ露日兩國政府ハ右ノ通信料ヲ左ノ如ク減スルヲ

外務省

約ス乃チ

双方各地ヨリノ通信料

α) 露國ヨリハ每語一フランクニ十サニチム

β) 日本ヨリハ每語五十五サニチム

右通信料取立方ハ一千八百八十三年一月一日ヨリ始ムヘ
シ

此約定ハ其廢止ノ期限ヲ定メスニテ施行シ廢約セント
欲スルトキハ「結約者」ノ一ヨリ廢約ノ旨ヲ届出ラタル
後六ヶ月ヲ過キタル上ニテ為スヘシ故具

一千八百八十二年十二月四日(十六日)東京於テ

ローゼン (自記)

日本皇帝陛下ノ外務卿井上馨閣下

布哇政府ト締結ノ條約中領事裁判權ニ關スル條
款無効ノ件

明治四年七月四日布哇政府ト締結シタル條約中領事
裁判權ニ關スル規程ハ自今無効ニ歸シタルモノトス
因テ自今布哇國民ハ現在施行シ及將來施行スル法
律命令ノ範圍内ニ於テ帝國内何地ニモ往來居住シ
其居住地ニ於テ家屋倉庫ヲ借受ケ又ハ總テ適法
ノ業務ヲ営ムコトヲ得

(明治廿七年四月十日勅令第百四十一号)

外務省

66

明治二十七年勅令第四十一号ニ基キ布哇國民ノ
國籍ヲ證明スル為メ明治二十二年外務省令第
三号ヲ以テ定メタル國籍證明書規則ヲ適用ス
(明治二十七年四月十三日外務省令第五号)
國籍證明書規則ハ墨國ノ部ニアリ

外務省

國籍證明書

第一條

墨西哥合衆國人民ハ本規則ノ手續ニ依リ地方廳ヲ經テ國籍證明書ノ交付ヲ外務省ニ出願スルコトヲ得

第二條

國籍證明書ヲ得シコトヲ欲スル者ハ自ラ地方廳ニ出願シ其國籍ノ証據トナルヘキ書類ヲ添ヘ國籍氏名年齢ヲ記シタル願書ヲ地方長官ニ差出スヘシ但シ本國領事ノ駐在スル地ニ在リテハ其願書ニ領事ノ稟書アルヲ要ス

第三條

出願人若シ國籍ノ証據トナルヘキ書類ヲ所持セザル時ハ其願書ニ記載シタル國籍ニ屬スルコトヲ書面ヲ以テ確言スヘシ

第四條

地方長官國籍證明書交付ノ願書ヲ受領シタル時ハ願書記載ノ事實ニ就キ取調ヲ遂ケ意見ヲ具シテ其願書ヲ外務省ニ送致スヘシ

第五條

國籍證明書ハ外務省ヨリ地方廳ヲ經テ出願人ニ交付ス但シ之ニ對シ手数料ヲ要セス
(明治廿二年七月二十九日外務省令第九号)

外務省

65

國籍證明書規則

第一條

墨西哥合衆國人民ハ本規則ノ手續ニ依リ地方廳ヲ經テ國籍證明書ノ交付ヲ外務省ニ出願スルコトヲ得

第二條

國籍證明書ヲ得ニコトヲ欲スル者ハ自ラ地方廳ニ出頭シ其國籍ノ證據トナルヘキ書類ヲ添ヘ國籍氏名年齢ヲ記シタル願書ヲ地方長官ニ差出スヘシ但シ本國領事ノ駐在スル地ニ在リテハ其願書ニ領事ノ裏書アルヲ要ス

第三條

出願人若シ國籍ノ證據トナルヘキ書類ヲ所持セサル時ハ其願書ニ記載シタル國籍ニ屬スルコトヲ書面ヲ以テ確言スヘシ

第四條

地方長官國籍證明書交付ノ願書ヲ受領シタル時ハ願書記載ノ事實ニ就キ取調ヲ遂ケ意見ヲ具シテ其願書ヲ外務省ニ送致スヘシ

第五條

國籍證明書ハ外務省ヨリ地方廳ヲ經テ出願人ニ交付ス但シ之ニ對シ手数料ヲ要セス
(明治廿二年七月二十九日外務省令第九号)

天津條約

大日本國特派全權大使參議兼宮内卿勲一等伯爵伊藤

大清國特派全權大臣

太子大傳文華殿大學士北洋通商大臣
兵部尚書直隸總督一等肅毅伯翁

李

各々奉スル所

諭旨ニ遵ヒ公同會議シ專條ヲ訂立シ和誼ヲ敦クス
有ル所ノ約款左ニ臚列ス

一 議定ス中國朝鮮ニ駐紮スルノ兵ヲ撤シ日本國朝鮮ニ
在リテ使館ヲ護衛スルノ兵弁ヲ撤ス畫押蓋印ノ日ヨリ
起リ四月ヲ以テ期トシ限内ニ各々數ヲ盡シテ撤回スル
ヲ行ヒ以テ兩國滋端ノ虞アルコトヲ免ル中國ノ兵ハ馬山浦
ヨリ撤去シ日本國ノ兵ハ仁川港ヨリ撤去ス

一 兩國均シク允ス朝鮮國王ニ勸メ兵士ヲ教練ニ以テ自ラ
治安ヲ護スルニ足ラシム又朝鮮國王ニ由リ他ノ外國ノ武弁
一入或ハ教入ヲ選僱シ委ヌルニ教演ノ事ヲ以テス嗣後
日中兩國均シク負テ派シ朝鮮ニ在リテ教練スルコトヲ
テシ

外務省

一 將來朝鮮國若シ變亂重大ノ事件アリテ日中兩國或ハ
一國兵ヲ派スルヲ要スルトキハ應ニ先ツ互ニ行文知照ス
ヘシ其事定マルニ及テハ仍即チ撤回シ再ヒ留防セス
大日本國明治十八年四月十八日

特派全權大使參議兼宮内卿勲一等伯爵伊藤博文畫押

大清國光緒二十一年三月初四日

特派全權大臣

太子大傳文華殿大學士北洋通商大臣
兵部尚書直隸總督一等肅毅伯翁

李鴻章畫押

大清國特派全權大臣

太子太傅文華殿大學士兵部尚書直隸總督一等肅毅伯

李

大日本國特派全權大使參議兼宮内卿勳一等伯爵伊藤

各遵所奉

諭旨公會議訂立專條以敦和誼所有約款臚列於左

一議定中國撤駐紮朝鮮之兵日本國撤在朝鮮護衛使館之兵弁自畫押蓋印之日起以四箇月為期限內各行盡數撤回以免兩國有滋端之虞中國兵由馬山浦撤去日本國兵由仁川港撤去

一兩國均允勸朝鮮國王教練兵士足以自護治安又由朝鮮國王選催他外國武弁一人或數人委以教演之事嗣後中日兩國均勿派員在朝鮮教練

大清國光緒十一年三月初四日

外務省

特派全權文華殿大學士直隸總督一等肅毅伯爵李鴻章

大日本國明治十八年四月十八日

特派全權大使參議兼宮内卿勳一等伯爵伊藤博文

天津條約ニ附帶スル照會文

照會

大清國欽差全權大臣太子大傅文華殿大學士北洋通商大臣兵部尚書直隸總督一等肅毅伯爵李

照會ノ事ヲ為ス照シ得タリ上辛十月朝鮮漢城之

變中國ノ官兵ト日本官兵ト朝鮮ノ王宮ニ在テ争鬪

ニ節ハ實ニ兩國國家意料ノ外ニ出ツ本大臣殊ニ

惋惜ヲ為ス惟タ念フ中日兩國ノ和好年久シ中國ノ

兵官等一時情急ニ已ラ得スミテ争鬪スト雖モ宛

ニ未タ小心ニ事ヲ將フ能ハス應ニ本大臣由リ文ヲ

行リ戒飭スヘシ貴大使ノ送リ閱スル日本ノ民人本

多收之輔妻等ノ供状ニ漢城內ニ在テ華兵屋ニ入り

掠奪シ人命ヲ戕斃スル情事アルト謂フニ至リテハ

外務省

但タ中國兵ニ的確ノ證據ナシ自カラ應ニ本大臣由

リ負ラ派シ訪查シ明確ニ供證ヲ取具シ如シ果シ

テ當日實ニ某營ノ某兵アリテ衝ニ上リ事ヲ滋シ

日民ヲ殺掠セシコト確トシテ見證アレハ定メテ中國ノ

軍法ニ照シテ嚴ニ從ヒ拏辦スヘシ此為メニ備ニ具シ

貴大使ニ照會シ者照ヲ煩ヌラ請フ須ラク照會ニ

至ヘキ者

右照會

大日本時派全權大使奏議兼宮内卿勲一等伯爵伊藤

光緒十一年三月初四日

照會

大清欽差全權大臣

太子太傅文華殿大學士北洋通商大臣
兵部尚書直隸總督一等肅毅伯 李

照會事照得上年十月朝鮮漢城之變中國官兵與
日本官兵在朝鮮王宮爭鬪一節實出兩國

國家意料之外本大臣殊為惋惜惟念中日兩國和好
年久中國兵官等雖一時情急不得已而爭鬪究未
能小心將事應由本大臣行文戒飭至

貴大使送閱日本民人亦多收之輔妻等供狀謂在
漢城內有華兵入屋掠奪我斃人命情事但中國
並無的確證據自應由本大臣派員訪查明確取
具供證如果當日實有某營某兵上街滋事殺
掠日民確有見證定照中國軍法從嚴拏辦為此
備具照會貴大使請煩查照須至照會者

右 照 會

大日本特派全權大使參議兼宮內卿敷島等伯爵伊藤

光緒十一年三月初四日

輕木板、抽税ニ関スル公文 往文

大日本國欽差全權大臣鹽田 為

照會事照得上年五月初十日江海關告示進口
輕木板稅按估價值百抽五等因查如此辦理不但
水商受其苦累且與條約所載進口輕木板每四方
長濶千幅地茶錢等語不符即江海關暨與江海
關一律辦理之關無乃不遵條約凡條約所載此國如
有擬酌改之處預行知照俟彼國妥協方可施行是
以本大臣除論江海關之舉外一面照請

貴王大臣迅飭海關將輕木板稅值百抽五之新法
作為罷論仍復上年五月初十日以前之旧章若於
其後所有情勢必項變通

外務省

本大臣固不敢辭也須至照會者

右 照 會

大清欽命總理各國事務王大臣

明治貳拾壹年貳月 初參 日

輕木板ノ抽税ニ関スル公文 来文

大清欽差命總理各國事務王大臣

為

照復事接准

照稱輕木板稅一事請仍照舊則辦理以順商情等
固前來本衙門查輕木板稅各關皆以厚一因制為
准獨粵海關厚三因制為一較輕重懸殊徵稅互
異是以前經改為按照稅則未載之洋土貨進
出口稅值百抽五辦理今批

貴大臣文稱商情既有不願本衙門詳加酌奪現擬
變通辦理以恤商情業經飭行稅務司轉飭各稅
司凡輕木板進出口以每千幅地厚一因制徵稅七錢
為准此外多寡不符即按此類推總以有若干之稅
徵若干之稅如此辦法極為公允除咨行

外務省

南洋大臣外相應照覆

貴大臣查照可也須至照會者

右 照 會

大日本國欽差全權大臣鹽田

光緒拾叁年拾貳月

貳拾捌

日

輕木板、抽税ニ関スル公文

大日本國欽差全權大臣鹽田

為

照復事 明治二十一年二月初九日接准

貴王大臣照稱輕木板稅一事現擬變通辦理以恤商情業經飭行總務司轉飭各稅司凡輕木板進出口以每千幅地厚一因制徵稅七錢為准此外多寡不符即按此類推等因前來查如此辦理輕木板稅法與水行之規並行不悖該商受其便宜在本大臣亦為妥當相應照復

貴王大臣查照可也須至照復者

右 照 會

大清欽命總理各國事務王大臣

明治貳拾陸年肆月

拾肆

日

外務省

清日難破船救助費償還約定ノ件

往文

大日本國、欽差全權大臣大島、

為

照會事 茲以本國與

貴國隔海相對船隻往來絡繹不絕、其因遭
風觸礁等事、彼此救護難民亦所常有、所有
需用經費自應商定章程以便隨時遵照、
一兩國彼此極救沿海遭難人民、所給衣食、川資
醫藥、以及撈屍埋葬等項諸費、均由該難民
之國政府歸還、
一兩國極救難民、所派負弁川資、照料、護送以
及收發電報、文件等項諸費、無庸由該難民
之國政府歸還、

外務省

一兩國救存遭難船隻以及貨物、所需人工等項諸
費、應由收領該船隻、貨物之人歸還、
以上三款、似屬可行、相應照請
貴王大臣察核照復、一俟定議之後、當由兩國彼
此、行知沿海各地方官、一體照辦可也、為此照會
須至照會者。

右

照

會

大清欽命總理各國事務王大臣

明治貳拾參年伍月

貳拾陸

日

清難破船救助費償還約定ノ件 未文

大清欽命總理各國事務王大臣 為

照復事、光緒十六年四月初八日、接准

照稱、茲以本國與貴國隔海相對船隻往來絡繹不絕、其因遭風觸礁等事、彼此救護難民亦所常有、所有需用經費、自應商定章程以便隨時遵照、

一兩國彼此、救護沿海遭難人民、所給衣食、川資、醫藥、以及撈屍埋葬等項諸費、均由該難民之國政府歸還、

一兩國救護難民、所派員弁川資、照料、護送以及收發電報、文件等項諸費、無庸由該難民之國政府歸還、

一兩國救存遭風船隻及貨物、所需人工等項諸費、應由收領該船隻貨物之人歸還

外務省

以上三款、似屬可行、照請察覈照復等因前來、本爵大臣等業經閱悉意見相同、除咨行

南洋大臣及沿海各督撫、定於光緒十六年七月十七日、起一體照辦外、相應照覈

貴大臣查照可也、為此照復、須至照復者。

右 照 會

大日本國欽差全權大臣大島

光緒十六年肆月 拾參 日

交換証書

下名ハ明治二十八年四月十七日即光緒二十一年三月二十三日
下ノ関ニ於テ締結調印シタル大日本帝國皇帝陛下ト大
清帝國皇帝陛下トノ間ニ於ケル媾和條約及別約ノ批
准書ヲ交換スル為メ茲ニ會合シ右條約及別約ノ批准ヲ
篤ト對照シ其ノ各符合スルコトヲ認メ定式ニ依リ本日
右交換ヲ執行ス

右證據トシテ各此ノ交換証書ニ記名調印スルモノナリ
明治二十八年五月初八日即光緒二十一年四月十四日芝罘ニ於
テ之ヲ作ル

大日本帝國欽詔全權辦理大臣 伊東已代治

外務省

大清帝國欽差換約全權大臣三品銜 伍廷芳

大清帝國欽差換約全權大臣三品銜 聯芳

50

交換證書

大日本帝國

欽派全權辦理大臣伊東已代治

大清帝國

欽差換約全權大臣二品銜伍廷芳

欽差換約全權大臣三品銜聯芳為互換經奉

大日本帝國

大皇帝

大清帝國

大皇帝批准

大日本帝國與

大清帝國於明治二十八年四月十七日即光緒二十一年三月

二十三日在下之開所訂和約及別約互相會同將和約

外務省

及別約詳加查核俱屬妥善無訛照式互換

為此兩國全權大臣欲立文憑署名蓋印以昭信據

大日本帝國欽派全權辦理大臣伊東已代治

大清帝國欽差換約全權大臣二品銜伍廷芳

大清帝國欽差換約全權大臣三品銜聯芳

明治二十八年五月初八日

訂於煙台

光緒二十一年四月十四日

大日本國皇帝陛下及大清國皇帝陛下ハ下ノ
関聯和條約第五條第二項ノ規定ニ依リテ臺
湾省ヲ受渡スル為メニ大日本國皇帝陛下ハ臺
湾總督海軍大將後二位勳一等子爵樺山資紀
ヲ大清國皇帝陛下ハ二品頂戴前出使大臣李經
方ヲ各其ノ全權委員トシテ簡派セリ因テ各全權
委員ハ基隆ニ會同シ左ノ事項ヲ執行セリ

日清兩帝國全權委員ハ明治二十八年四月十七日即
光緒二十一年三月二十三日下ノ関ニ於テ締結ノ講和
條約第一條ニ依リ清國ヨリ永遠日本國ノ割典
ニタル臺灣全島及其附屬諸島並ニ澎湖列島即
英國グリニウィッチ東經百十九度乃至百二十度
及北緯二十三度乃至二十四度ノ間ニ在ル諸島嶼ニ於ケル

外務省

主權並ニ別冊目錄記載ノ如ク該地方ニ在ル城壘
兵器製造所及官有物ノ受渡ヲ完了セリ

右證據トシテ兩帝國全權委員ハ茲ニ記名調印ス
ルモノナリ

明治二十八年六月二日即光緒二十一年五月初十日基隆ニ
於テ二通ヲ作ル

大日本帝國全權委員

臺灣總督海軍大將
樺山資紀

樺山資紀

大清帝國欽差全權委員二品頂戴前出使大臣

李經方

臺灣全島及其附屬諸島並ニ澎湖列島ニ在ル
城壘兵器製造所及官有物目錄

一臺灣全島及澎湖列島ノ各開港場并ニ各府廳
縣ニ在ル城壘兵器製造所及官有物

一臺灣ヨリ福建ニ至ル海底電線ノ處理ニ関シテハ
後日日清兩國政府ニ於テ商議決定スヘシ

外務省

7-0199

0206

大日本帝國

大皇帝陛下及

大清帝國

大皇帝陛下為照在下之關所定和約第五款

第二條交接臺灣一省

大日本帝國

大皇帝陛下簡派臺灣總督海軍大將從二位勳

一等子爵樺山資紀

大清帝國

大皇帝陛下簡派二品頂戴前出使大臣李經方各

為全權委員因兩全權委員會同於基隆所辦事

項如左

日中兩帝國全權委員交接明治二十八年四月十七日

務省

即光緒二十一年三月二十三日在下之關兩帝國欽差

全權大臣所定和約第二款

中國永遠讓與日本之臺灣全島及所有附屬各島

嶼並澎湖列島即在英國格林尼次東經百十九度

起次至百二十度止及北緯二十三度起至二十四度之

間諸島嶼之管理主權並別冊所示各該地方所

有堡壘軍器工廠及一切屬公物件均皆清楚為

此兩帝國全權委員欲立文據即行署名蓋即以

昭確實

明治二十八年六月二日

光緒二十一年五月初十日 訂於基隆繕寫兩分

大日本帝國全權委員 臺灣總督海軍大將 樺山資紀

大清帝國欽差全權委員 從二位勳一等子爵 李經方

臺灣全島及所有附屬各島嶼並澎湖列島所有
堡壘軍器工廠及屬公物件清單
一臺灣全島澎湖列島之各海口並各府廳縣所有堡
壘軍器工廠及屬公物件
一臺灣至福建海線應如何辦理之處俟兩國政府
隨後商定

外
務
省

清國軍費賠償金在拂ニ関スル議定書

大日本國明治二十八年四月十七日即チ大清國光緒二十八年三月二十三日兩國議定ノ媾和條約第四條ニ照シ清國政府ヨリ日本國政府ニ賠償スヘキ軍費金第一回拂込ノ期節ニ近付キタルニ因リ其時並ニ其後トモ受授ノ方法ヲ左ニ議定セリ

一該庫平銀二億萬兩ハ兩國取扱ノ便ヲ計リ英貨總計三千二百九十萬九百八十磅七志七片ニ引直シ倫敦ニ於テ受授ス條約ニ照シ付スヘキ利子モ亦此率ニ依リ仍ホ英貨ニテ受授スルモノトス

一清國政府及日本國政府ハ倫敦駐劄全權公使ヲ以テ其代表者ト為シテ受授セシムルモノトス
一受授ノ期節ニ至ル毎ニ其都度該清國公使ハ前

以テ拂込金額及時日ヲ該日本國公使ニ通知スルモノトス

右日本文及漢文各二通ヲ作り對照シテ記名調印シ双方其各一通ヲ執テ證據トス

明治貳拾捌年拾月六日
光緒貳拾壹年捌月六日

林 董

敬 信

翁 同 龢

汪 鳴 鑾

張 蔭 桓

外務省

46

清國軍費賠償在冊ニ関スル議定書
大日本國欽差全權大臣林

大清欽命總理各國事務

汪張

為

公立文憑事按照兩國

時簡全權大臣於

明治二十八年四月二十七日
光緒二十一年三月二十五日

所訂之講和

條約第四款清國政府第一項應賠日本國政府軍
費之期現在伊通乃將其時並其後如何交收之
處議定如左

一所有庫平銀貳萬萬兩為硬兩國辦理起見核成
英貨合參千二百玖拾萬玖百捌拾磅柒希令柒邊
士均在倫敦用英貨交收至其照約應付之利息

外務省

亦按比率仍用英貨交收

一清國政府與日本國政府派其駐英

欽差全權大臣代為交收

一每交收在通該清國大臣輒將應交之款數日時
先期咨會該日本國大臣查照

以上繕寫漢文各二分校對無訛署各蓋印彼此
執各一各以昭信守須至文憑者

明治貳拾捌年拾月六日

林董

光緒貳拾陸年捌月十六日

敬信

翁同龢

汪鳴鑾

張蔭桓

太平洋ニ於ケル日西版圖ノ境界ニ関スル宣言

一 日本國皇帝陛下ノ政府及西班牙國皇帝陛下ノ政府ハ均シク兩國間ニ現存スル所ノ好誼ヲ増進セムコトヲ希望シ而シテ太平洋ノ西部ニ於ケル兩國版圖ノ所領權ヲ明確ニ為シ置クコト右希望ヲ達スルノ一助ナルベシト信スルヲ以テ之カタノ兩國政府ヨリ委任ヲ受ケタル下名即チ日本國皇帝陛下ノ外務大臣臨時代理文部大臣侯爵西園寺公望及西班牙國皇帝陛下ノ特命全權公使ドニジヨゼド、エリカ、井、カルウオハ左ノ宣言ヲ協議決定セリ

外務省

第一 此宣言ニ於テハバシ―海峡ノ航行ニ得ヘキ海面ノ中央ヲ通過スル所ノ緯度並行線ヲ以テ太平洋ノ西部ニ於ケル日本國及西班牙國版圖ノ境界線ト為スヘシ

第二 西班牙國政府ハ該境界線ノ北方及北東方ニ在ル島嶼ヲ以テ其有ナリトスルコトナキ旨ヲ宣言ス

第三 日本國政府ハ該境界線ノ南方及南東方ニ在ル島嶼ヲ以テ其有ナリトスルコトナキ旨ヲ宣言ス

明治二十八年八月七日即チ西曆千八百九十五年八月七日東京ニ於テ宣言書二通ヲ作り之ニ記名スルモノナリ

侯爵 西園寺公望

ドニ、ジヨゼド、エリカ、井、カルウオ

萬國電信條約へ加入承諾書

日本政府承認公報

下ニ署名セル露國劄駐日本代理公使ヨリミテ日本政府ハ千八百七十五年七月十日聖彼得堡府ニ於テ決定セシ萬國電信條約書ノ通知ヲ得シ後該書中第十ハ條未タ盟約ニ加ハラサル邦國ノ為メ設ケニ權利ニ基キ日本國ヲ以テ此萬國電信條約中ニ加入スルヲ承認シ該公報中ニ條約全文ヲ記入セシ者ト看做シ且該政府ハ露國皇帝及ヒ自他全盟國ニ對シ此條約中ニ掲載セル條款實行ニ付キ協力ス可キヲ明約ス

外務省

此他日本帝國政府ニ於テハ外國トノ通信料ハ歐洲外通信方法ニ照シ日本全國中通信語ノ最低敷ヲ有セサル一定稅則ヲ採用ス
該通信料ハ一語ニ付キ墨銀貳拾錢即チ佛貨一フヲシテ十サニキムヲ課ス可シ
此書ノ真正ナルヲ認スルカ為メ公正至當ナル方式ニ照シタル全權ヲ有シ以テ本公報書ニ記名シ且調印ス

聖彼得堡府ニ於テ千八百七十九年一月十七日
二十九日

西

露國政府承認公報

日本皇帝陛下ハ千八百七十五年七月^{十四日}聖彼得堡府ニ於テ決定セシ万国電信條約ニ付キ尤ノ如ク承諾セリ

下ニ署名セル露國副駐日本代理公使ヨリミテ日本政府ハ千八百七十五年七月^{十四日}聖彼得堡府ニ於テ決定セシ万国電信條約書ノ通知ヲ得シ後該書中第十八條未タ盟約ニ加ハラサル邦國ノ為メ設ケシ權利ニ基キ日本國ヲ以テ此万国電信條約中ニ加入スルヲ承諾シ該公報中ニ條約全文ヲ記入セシ者ト看做シ且該政府ハ露國皇帝及々自他全盟國ニ對シ此條約中ニ掲載セル條款實行ニ付キ協力ス可キヲ明約ス

外務省

此他日本帝國政府ニ於テハ外國トノ通信料ハ歐洲外通信方法ニ照ラシ日本全國中ハ通信語ノ最低數ニ拘ハラサル一定稅額ヲ供用ス可キヲ告ク該通信料ハ一語ニ付墨銀貳拾錢即チ佛貨一フランクニサシムヲ課ス可シ

此書ノ真正ナルヲ認スルカ為メ公正至當ナル方式ニ照シタル全權ヲ有シ以テ本公報書ニ記名シ且調印ス

聖彼得堡府ニ於テ千八百七十九年一月^{十七日}

西

之ヲ為テ特許ヲ得シ露國外務大輔ハ該政府及ヒ他
同盟國ニ代リ承諾ノ公報ヲ明認シ且該政府ハ日本
皇帝陛下ニ對シ條約書中掲載セシ條款ヲ悉ク執行
ス可キヲ公告ス

此書ノ真正ナルヲ証スルカ為メ下ニ記名セル者
ハ之ニ記名シ且調印ス

聖彼得堡府ニ於テ千八百七十九年一月_{二十七日}
_{二十九日}

ギルス

外務省

92

7-0199

0214

萬國郵便聯合條約

日耳曼、日耳曼保護國、亞米利加合衆國、亞然的音共和國、
國、奧地利、洪島利、白耳義、^{「ポリビア」}、伯西兒、勃爾瓦利、智
利、古倫比亞共和國、公果獨立國、古西多利和共和國、
抹及其殖民地、^{「ドミニカン」}共和國、埃及、^{「エラワドル」}、西
班牙及其殖民地、佛蘭西及其殖民地、大不烈顛及其殖
民地、濠太刺利英領殖民地、加那太、英領印度、希臘、<sup>「ガラ
マラ」</sup>、^{「ハイチ」}共和國、布哇王國、^{「ホンジエラ」}共和國、伊
太利、日本、^{「リベリア」}共和國、^{「歴山堡」}、墨西哥、滿得涅各羅
^{「ニカラガ」}、^{「那威」}、^{「巴拉ダ」}、和蘭及其殖民地、白露、波斯、葡
萄牙及其殖民地、羅馬尼、露西亞、薩瓦多、塞爾維、暹羅王
國、南亞弗利加共和國、瑞典、瑞西、突尼斯攝政國、土耳其、
^{「ウルデー」}及^{「ベネズエラ」}合衆國、間ニ締結セル萬國

外務省

郵便條約

下ニ氏名ヲ連署スル前掲各國政府ノ全權委員ハ千八
百七十八年六月一日巴里ニ於テ締結セシ萬國郵便條
約第九條ニ據リ維也納ニ於テ大會議ヲ開キ更ニ各
國ノ批准ヲ受テベキモノトシテ前記條約及千八百八
十五年三月二十一日里斯本ニ於テ締結セシ追加書ヲ
協議修正セシ條款左ノ如シ

第一條

本條約ヲ締結スル諸國並ニ今後之ニ加盟スル諸國ハ
各々其郵便局ノ間ニ互ニ郵便物ヲ交換スル為メ萬國
郵便聯合ノ名稱ヲ以テ單一ノ郵便和疆ヲ組成ス

第二條

本條約ノ條款ハ聯合中ノ甲國ヨリ發シ聯合中ノ乙國

ニ宛タル信書通常端書往復端書各種印刷物詠詠用及
商業用書類並ニ商品見本及聯合中ノ諸國ト聯合外ノ
諸國トノ間ニ二箇以上ノ聯合國ノ媒介ニ依リ前記郵
便物ノ郵送交換ニ適用スヘキモノトス

第三條

一 境界相接スル國或ハ他廳ノ媒介ヲ借ラスシテ相
互直接ニ郵便物ヲ交換シ得ヘキ國ノ郵政廳ハ悞
議ノ上其境界ヲ互ニ通過シ或ハ其一國ノ境界ヨ
リ他ノ一國ノ境界迄各自ノ郵便物ヲ運送スル條
件ヲ約定スヘシ

二 甲乙兩國ノ間ニ其一國ニ屬スル郵船又ハ船舶ヲ
以テ直チニ海運ヲ為ストキハ特殊ノ約定アルモ
ノヲ除キ媒介ノ運搬ト見做スヘシ此海運ヲ以テ

務省

運送スルモノ並ニ甲國ニアル兩郵便局ノ間ニ於
テ乙國ノ管スル海運若クハ陸運ノ媒介ヲ以テ運
送スルモノハ共ニ左ノ條款ニ照シテ處理スヘキ
モノトス

第四條

一 聯合邦疆内ニ於テハ互ニ越境運送ノ自由ヲ保護
シ之ヲ妨害スルコトナサルヘシ

二 故ニ聯合ノ諸郵政廳ハ郵便事務ノ需用ト其必要
トニ從ヒ閉囊或ハ開囊ヲ以テ一廳若クハ數廳ノ
媒介ニ依リ互ニ其郵便物ヲ差立ルヲ得

三 聯合中ナル兩郵政廳ノ間ニ聯合中ナル他ノ一廳
或ハ數廳ノ運搬ニ依リ開囊若クハ閉囊ニテ郵便
物ヲ交換スルトキハ其郵便物ノ通過スル諸國或

ハ其運搬ヲ為ス諸國へ各々左ノ繼越運送賃ヲ拂
フヘシ

第一 陸路ハ信書或ハ端書一「キログラム」ニ付
ニ「フランク」其他ノ物品ハ一「キログラム」
ニ付二十五「サニチーム」

第二 海路ハ信書或ハ端書一「キログラム」ニ付
十五「フランク」其他ノ物品ハ一「キログラ
ム」ニ付一「フランク」

四 左ニ記載スルモノハ前項ノ限ニアラス

第一 現今已ニ繼越運送賃ヲ納メス或ハ更ニ
低下ノ約束ヲ實行スル國々ニ於テハ左
ノ第三ニ記載スル場合ヲ除キ其他ハ從
前ノ通タルヘシ

外務省

第二 現時海路繼越運送賃ヲ信書或ハ端書一
「キログラム」ニ付五「フランク」其他ノ物品
一「キログラム」ニ付五十「サニチーム」ト定
メタル國々ニ於テハ今後モ此割合ヲ改
メサルヘシ

第三 三百海里ヲ超過セサル海運ヲ以テ運送
スル郵便物ハ其海運ヲ管スル郵政廳已
ニ陸地運送ノ部ニ於テ其郵便物ニ付陸
運賃ヲ收メタルトキハ復其海運賃ヲ收
メサルヘシ若シ然ラスシテ陸地運送ノ
部ニ於テ其郵便物ニ付陸運賃ヲ收メサ
ルトキハ信書或ハ端書一「キログラム」ニ
付ニ「フランク」其他ノ物品一「キログラム」



ニ付二十五「ガニチム」ヲ徴收スヘシ

第四 二國以上ノ郵政廳ニ於テ海運ヲ為スト
 キハ其全路ノ運送賃ハ信書或ハ端書一
 キログラムニ付十五「フランク」其他ノ物
 品一「キログラム」ニ付一「フランク」ヲ超過
 スヘカラス而シテ斯ノ如キ場合ニ於ケ
 ル運送賃ハ其運送ノ距離ニ應シテ各廳
 ノ間ニ分割スヘシ尤モ其關係スル諸國
 ノ間ニ特殊ノ約定アルモノハ此限ミ
 ラス

第五 本條記載ノ運送賃ハ聯合外郵政廳ノ管
 理ニ係ル運搬ト聯合内ト雖モ一廳ニ於
 テ他ノ一廳若クハ數廳ノ利益ヲ謀リ或
 ハ其依頼ニ依リ特ニ開設若クハ維持ス
 ル特殊ノ運搬トニハ之ヲ適用セス此兩
 種ノ運搬ニ關スル條件ハ其關係スル認
 廳ノ間ニ於テ協議約定スルコトヲ得
 一シ

五 繼越運送賃ハ郵便物差立國ノ郵政廳之ヲ負擔ス
 一シ

六 此繼越運送賃ノ總勘定ハ毎三箇年第二十條ニ記
 載スル納目規則ヲ以テ定ムル二十八日ノ期限中
 ニ調製スル統計表ニ基キ之ヲ施行スヘシ

七 各郵政廳相互ノ間ニ發著スル郵便物差立國へ返
 送スル返信端書再發又ハ誤達ノ郵便物、沒書、到達
 證、郵便為替其他都テ郵便事務ニ關スル書類ハ其
 海陸ノ繼越運送賃ヲ免除スヘシ

外務省

96

第五條

一 聯合邦疆内郵便物運送ノ税金ハ從來配達ノ設ケ
アル聯合國又ハ後來配達ヲ開クヘキ聯合國共ニ
其名宛人ノ住所ヘ配達スル迄ヲ合シ左ノ如ク定
ムヘシ

第一 信書ハ一通毎ニ且ツ十五グラム又ハ十

五グラムノ端數ニ付前辨ノトキハ二十

五「サニチー」前辨ナキトキハ其二倍

第二 郵便端書ハ通常端書或ハ往復端書ノ各

片ニ付十「サニチー」

未納税ノ郵便端書ハ未納税信書ノ税ヲ
徴收ス

第三 各種ノ印刷物訴訟用及商業用書類並ニ

外務省

商品見本ハ一ノ名宛アル一箇ノ物品若

クハ一箇ノ束物毎ニ且ツ五十グラム

又ハ五十「グラム」ノ端數毎ニ五「サニチー」

但如斯物品若クハ束物ハ決シテ信

書若クハ現ニ相互ノ間ニ往復スル通信

文ノ性質ヲ具アル書類ヲ包含スヘカラ

ス且ツ検査ニ易ク包装スヘシ

訴訟用及商業用書類ノ郵便税ハ一箇ニ付二十五

「サニチー」又商品見本ノ郵便税ハ一箇ニ付十

「サニチー」ヲ降下スヘカラス

二 前項ニ定ムル郵便税ノ外左ノ増税ヲ徴收スルコ

トヲ得
第一 信書或ハ端書一「キログラム」ニ付十五「

<p>ラニク「其他ノ物品一」キログラムニ付一 「フランク」ノ海路継越運送賃ヲ拂フヘキ 郵便物ニ付テハ其運送賃ヲ適用スル諸 國ノ關係ニ於テ信書一通分ニ付二十五 「センチ」端書一枚ニ付五「センチ」 其他ノ物品ハ五十「グラム」若クハ五十「グ ラム」ノ端數ニ付五「センチ」 「センチ」ヲ超過セ サル均一ノ増税</p>	<p>第二 聯合外ノ郵便廳ニ於テ管理スル運搬或 ハ聯合内ニ於テ特ニ費用ヲ要スル特殊 ノ運搬ニ屬スル各郵便物ニ就テハ其費 用相當ノ増税</p>	<p>三 不足税ノ郵便物ハ其種類ニ拘ハラズ都テ受取人 ヨリ其不足額ノ二倍ヲ徴收スヘシ 但シ此二倍額ハ名宛國ニ於テ同種類同重量及同 出處未納税郵便物ニ付徴收スル税額ヲ超過スル ヲ得ス</p>	<p>外務省</p>	<p>四 信書及郵便端書ヲ除キ其他ノ郵便物ハ次クモ郵 便税ノ一部分ヲ前拂スヘシ</p>	<p>五 商品見本ノ包束物ハ市價ヲ有スル物品ヲ封入ス ルヲ得ス其重量ハ二百五十「グラム」且ツ其尺度ハ 長サ三十「センチメートル」幅二十「センチメートル」 厚サ十「センチメートル」若シ巻物體ノモノナルト キハ長サ三十「センチメートル」中徑十五「センチメ ートル」ヲ超過スルヲ得ス但シ關係國郵政廳ハ悞 議ノ上其相互ノ交換ニ於テ前記ノ制限ヲ超過セ</p>
--	--	--	------------	---	--

タル重量尺度ヲ採用スルヲ得

六 訴訟用及商業用書類並ニ印刷物ノ包束物ハ其重量ニ「キログラム」及其一面ノ寸尺ハ四十五「センチメートル」ヲ超過スルヲ得ス但シ卷物體ノ包束物ニシテ其中徑十「センチメートル」其長サ七十五「センチメートル」ヲ超過セサルモノハ之ヲ郵送スルヲ得

第六條

一 第五條ニ記載スル郵便物ハ書留トシテ差立ツルコトヲ得

二 書留郵便物ハ差出人ヨリ左ノ郵便税ヲ徴收ス

第一 郵便物ノ種類ニ依リ通常前拂ノ税額

第二 差出人へ交付スル領收証ヲ合シ二十五

外務省

「センチメートル」ヲ超過セサル書留手数料

三 書留郵便物ノ差出人ハ二十五「センチメートル」ヲ超過

セサル手数料ヲ前拂スルトキハ其郵便物ノ到達

証ヲ請求スルヲ得

第七條

一 書留郵便物ハ其金額五百「フラン」迄ヲ限り代金

引換渡方法ノ開設ヲ承諾シタル國々ノ間ニ於テ

ハ該方法ニ據リテ差立ツルヲ得此郵便物ハ書

留郵便物ト同一ノ手續ニ依リ同一ノ税金ヲ徴收

スヘシ

二 名宛人ヨリ取立タル金額ハ其郵便為替料及ヒ十

「センチメートル」ノ取立手数料ヲ扣除シタル後郵便為

替ニ依リ差出人ニ送付スヘシ

第八條

一 書留郵便物ノ紛失セシトキハ天災地変其他防止ニ難キ場合ヲ除キ其差出入或ハ差出入ノ依頼ニ由リ其名宛人ハ五十「アラング」ノ償金ヲ要求スルコトヲ得

二 償金支拂ノ義務ハ差立局ヲ管理スル郵政廳之ヲ負擔ス但シ該郵政廳ハ辨償ノ責アル郵政廳即チ其領地内或ハ其管掌中ニ於テ紛失ヲ生シタル郵政廳ニ對シ償金ノ拂戻ヲ要求スルコトヲ得

三 郵便物ヲ異議ナク受領シタル後其名宛人ニ配達ニ若クハ規則ニ依リ繼越郵政廳ニ引渡シタルコトヲ證明シ能ハサル郵政廳ハ其及對ノ證左ヲ舉グル迄ハ償金支拂ノ費ニ任ヌルモノトス但シ留

外務省

置郵便物ニ就テハ名宛國ノ現行規則ニ據リ姓名身分共ニ該郵便物ノ表記ト同一ナルコトヲ證明セル人ニ交付シタルトキハ其責ヲ免カルモノトス

四 差立廳ニ於テ償金ノ任拂ハ可成速ニ之ヲ為スヘシ遲ラモ其要求ノ日ヨリ起算シ一箇年ヲ超過スルヲ得ヌ又辨償ノ責アル郵政廳ハ遲滞ナク差立廳ニ拂戻スヘシ若シ責任郵政廳ニ於テ償金ノ任

拂ヲ承諾セサル旨ヲ差立郵政廳へ通知スル場合ニ於テハ責任廳ハ其任拂ノ不承諾ヨリ生スル費用ヲ差立廳へ辨償スヘシ

五 償金ノ要求ハ書留郵便物差立ノ日ヨリ一箇年間ヲ限り之ヲ受理ス此期限ヲ經過シタル後ハ要求

700

者ハ何等ノ辨償ヲ受ルノ權利ナキモノトス

六 書留郵便物送中紛失ニ其紛失何國ノ領地内ニ

於テ生ゼシヤヲ確定スル能ハサルトキハ關係諸

郵政廳ハ平等ニ其償金ヲ負擔スヘシ

七 書留郵便物ノ權利者受取証ヲ差出シ受領シタル

後ハ諸郵政廳其責ニ在セサルモノトス

第九條

一 郵便物ノ差出人ハ其郵便物ノ未タ名宛人ニ配達

セラレサル間ハ之ヲ取戻シ又ハ其名宛ヲ變更ス

ルコトヲ得

二 取戻又ハ名宛變更ノ請求ハ差出人左ノ税金ヲ自

辨スルトキハ郵便又ハ電信ニテ之ヲ送達ス

第一 郵便ニ依リ請求スルトキハ書留信書一

外務省

通函ノ郵便税

第二 電信ニ依リ請求スルトキハ通常ノ電報

料

三 本條ノ條款ハ郵便物ノ送中差出人ヲシテ隨意

ニセシムルコトヲ許サ、ル法制ノ國ニ於テ必ス

シモ之ヲ遵守スルノ義務ヲ有セサルモノトス

第十條

ブラニクヲ以テ貨幣ノ單位トセサル聯合諸國ハ第五

條及第六條ニ定ムル割合ニ從ヒ各々其國ノ貨幣ヲ以

テ税類ヲ定ムヘシ而シテ其端數ハ其條約第二十條ニ

記載スル實施細目規則ニ附スル表ニ從ヒ全數ニ切上

クルヲ得

第十一條

一 郵便物ノ何種類ヲ問ハス郵便税ノ前拂ハ必ズ其
 差立國ニ於テ効力ヲ有スル郵便切手ヲ以テスヘ
 シ但シ返信端書ニモテ其發行國ノ郵便切手ヲ有
 ルモノハ均シク正當ニ前拂セシモノト見做スヘ
 シ

二 郵便事務ニ関シ諸郵政廳ノ間ニ交換スル官用郵
 便物ニ限リ何等ノ郵便税ヲ課セサルヘシ

三 郵便船航海中其船上ニ設ケアル函内ニ投入シ或
 ハ其船長ニ交附スル郵便物ハ該郵便船ノ所屬國
 又ハ維持國ノ税表ニ從ヒ其國ノ郵便切手ヲ以テ
 前拂スルヲ得若シ船舶其航海ノ甲乙兩極点ニ若
 クハ航海途中ノ寄港地ニ碇泊スルトキ投函若ク
 ハ交付スル郵便物ハ投錨スル國ノ税表ニ從ヒ其
 國ノ郵便切手ヲ以テ納税セサレハ前拂ノ効力ナキ
 モノトス

外務省

第十二條

一 第五條第六條第七條第十條及第十一條ニ從ヒ徵
 收スル金額ハ全ク各郵政廳ノ所得ニ歸スヘシ但
 シ第七條第二項ニ記載スル為替ヨリ生スル收入
 金ハ此限ニテラス

二 故ニ本條第一項ニ記載スル為替ヨリ生スル收入
 金ヲ除キ聯合各郵政廳ノ間ニ何等ノ計算ヲ為ス
 ヲ要セス

三 信書及其他ノ郵便物トモ差立國若クハ名宛國ニ
 於テ差出入或ハ名宛人ヨリ前記諸條ニ記載スル
 モノヲ除キ其他ノ郵便税若クハ手数料ヲ徵收ス

102

7-0199

0224

ヘカテス

第十三條

一 聯合諸國中其相互ノ關係ニ於テ別配達業務ノ開設ヲ承諾セシ國々ノ間ニ於テハ差出人ノ請求ニ依リ各種郵便物ノ到着スルヤ直チニ特別配達ス

二 此郵便物ハ別配達ト稱シ特別配達料ヲ徴收ス此配達料ハ三十三「サ」チ「ム」ト定メ差出人通常郵便税ノ外ニ豫メ之ヲ完納シ差立國郵政廳ノ所得ニ歸スルモノトス

三 郵便局ヲ設置セサル地方ニ宛テタル別配達ノ郵便物ニ付テハ名宛郵政廳ニ於テ其内地郵便物配達ノ為メニ定メタル税額ニ達スル迄更ニ補充税

外務省

ヲ徴收スルヲ得但シ此補充税ハ差出人ノ前拂シタル別配達料ノ額ヲ引去リ或ハ補充税徴收國ノ通貨ニ對スル其相當額ヲ引去リ計算スヘキモノトス

四 豫メ納付スヘキ税金ノ全額ヲ前納セサル別配達郵便物ハ通常郵便物トシテ配達スヘシ

第十四條

一 聯合内ニ於テハ郵便物ノ再發ニ對シ何等ノ増税ヲ徴收セス

二 配達ニ能ハサル郵便物ニ付テハ先キニ遞送セシトキ媒介廳ニ於テ收入シタル継続運送賃ヲ返還スルヲ要セス

三 未納税金書及郵便端書並ニ不足税ノ諸郵便物ニ

70

ミテ再發ノ為メ若クハ配達ニ能ハサル為メ差立
國ニ返送セラレタルトキハ第一名宛國ヨリ差立
國へ直チニ發送シタル同性質ノモノト同一郵便
税ヲ差出人若クハ名宛人ヨリ徴收スヘシ

第十五條

一 閉鎖郵便ハ締盟國或ル一國ノ郵便局ト外國ニ碇
泊スル同國ノ艦隊司令官若クハ軍艦長トノ間ニ
他國ノ管理ニ属スル海陸郵便ノ媒介ニ依リ之ヲ
交換スルコトヲ得

二 閉鎖郵便ニ含有スル諸郵便物ハ軍艦ノ乗組士官
及ヒ其他ノ乗組員ヨリ發シ或ハ是等ニ宛タルモ
ノニ限ルヘシ此郵便物ニ適用スヘキ税額及運送
法ハ軍艦所屬國ノ郵政廳其内地ノ規則ニ從ヒ之

外務省

ヲ定ムルモノトス

三 關係諸國郵政廳ノ間ニ於テ特殊ノ約定アルモノ
ヲ除キ閉鎖郵便差立廳若クハ名宛廳ハ其媒介廳
ニ對シテ第四條ニ定ムル條款ニ據リ算定セル遞越
運送賃ヲ仕掛フヘシ

第十六條

一 左ニ掲クルモノハ郵送セサルハシ

甲 以クモ郵便税ノ一部分ヲ前掛セサル若ク
ハ容易ニ検査ニ得ル如ク包装セサル訴訟
用及商業用書類、商品見本並ニ印刷物

乙 第五條ニ定ムル重量及尺度ノ制限ヲ超過
スル同種類ノ郵便物

丙 市價ヲ有スル商品見本

124

<p>二 前項ニ記載スル郵便物ハ差立國へ返送ニ還付ノ途アルトキハ差出入ニ還付スヘシ</p>	<p>三 禁制ノ事項左ノ如シ</p> <p>第一 左記ノモノヲ郵便ニテ發送スル事</p> <p>甲 其品質郵便吏員ニ危害ヲ及ホシ若クハ他ノ郵便物ヲ汚穢損害スヘキ商品見本及其他ノ物品</p> <p>乙 爆發性、燃焼性、若クハ危険ナル物品、生虫ノ獸類及虫類但ニ實施細目規則ニ記載スル例外ノモノハ此限リニアラス</p> <p>第二 左記ノモノヲ通常又ハ書留郵便物ニ封入郵送スル事</p>	<p>外務省</p> <p>甲 流通正貨</p> <p>乙 關稅ヲ課スヘキ物品</p> <p>丙 金銀、寶石、珠玉其他高價ノ物品但ニ其國ノ法制ニ於テ封入若クハ遞送ヲ許サ、ル場合ニ限ル</p>	<p>四 前第三項ノ禁制ニ觸レタル郵便物ニシテ誤テ發送セラレタルモノハ其差立國へ返還スヘシ但シ名宛國郵政廳ニ於テ其内地ノ法律規則ニ據リ他ニ之ヲ處分シ得ヘキモノハ此限ニアラス</p>	<p>五 聯合各國ノ政府ハ低稅遞送ノ郵便物ニシテ其國內ニ於テ發行或ハ流布ノ條件ヲ規定スル法律勅令若クハ命令ニ牴觸シ又ハ現行ノ法規ニ依リ禁セラレタル文章、字句、圖畫等ヲ明記スル各種ノ郵便</p>
---	--	---	--	--

105

便物ヲ其領地内ヲ經テ運送又ハ配達スルコトヲ拒ムノ權利ヲ有ス

第十七條

一 聯合外ノ諸國ト關係ヲ有スル聯合内ノ郵政廳ハ聯合内ノ他廳ヲシテ此聯合外ノ諸國ト郵便物ヲ交換セシムル為メ其相互關係ノ利益ヲ享有セシムヘシ

二 聯合内ノ一國ト聯合外ノ一國トノ間ニ聯合他國ノ媒介ニ依リ開囊ヲ以テ交換スル郵便物其聯合疆外ノ運送ニ付テハ其媒介國ト其聯合外ノ國トノ間ニ於テ郵便ノ關係ヲ制定スル特殊ノ條約約定又ハ規則ニ據リ處理スヘシ

三 聯合外ノ國ニ發著スル郵便物ノ聯合疆内ニ係ル

外務省

繼越運送債ニ就テハ聯合外ノ國ト關係ヲ有スル聯合國ヨリ發著スルモノト同一視スヘシ

四 聯合外ノ國ニ宛テタル郵便物ハ聯合疆外ニ係ル繼越運送賃トシテ聯合外ノ國ト關係ヲ有スル聯合國ニ左ノ運賃ヲ拂フヘシ

甲 聯合外ノ海運ニ付テハ信書又ハ郵便端書

一「キログラム」ニ付二十「フランク」其他ノ物品一「キログラム」ニ付一「フランク」

乙 聯合外ノ陸運ニ付テハ時宜ニ依リ聯合外ノ媒介國ト關係ヲ有スル聯合國ヨリ通知スル重量每一「キログラム」ノ運賃

二國以上ノ郵政廳ニ於テ海運ヲ為ストキハ聯合内外ニ拘ハラズ其全路ノ運送賃ハ信書又ハ郵

106

便端書一「キログラム」ニ付二十「フラン」ク其他ノ物
 品一「キログラム」ニ付一「フラン」クヲ超過スヘカラ
 ス而シテ如斯場合ニ於ケル運送賃ハ其運送ノ距
 離ニ應シテ各廳ノ間ニ各配スヘシ凡モ其關係ス
 ル諸廳ノ間ニ特殊ノ約定アルモノハ此限ニアラ
 ス

六 前記ノ聯合疆外ニ係ル継越運送賃ハ差立國郵政
 廳之ヲ負擔シ其運送賃ハ開囊ト閉囊トニ拘ハラ
 ス總テ之ヲ適用ス然レトモ聯合國ヨリ發シ聯合
 外ノ國ニ宛テ又ハ聯合外ノ國ヨリ發シ聯合國ヘ
 宛テタル閉囊郵便ノ場合ニ於テ其継越運送賃ノ
 計算法ニ付テハ發ノ關係郵政廳ノ間ニ協議約定
 スヘシ

外務省

聯合國ト聯合外ノ國トノ間ニ聯合ノ他國ノ媒介
 ニ依リ交換スル郵便物ノ継越運送賃ニ関スル總
 勘定ハ聯合内ニ於ケル継越運送賃算定ノ為メ第
 四條ニ從ヒ調製スル統計表ト同時ニ調製スル統
 計表ニ基キ之ヲ施行スヘシ

八 聯合國ノ媒介ニ依リ聯合外ノ國ヨリ發著スル郵
 便物ニ付聯合國ニ於テ徵收スル郵便税額ハ聯合
 税額ヲ降下スヘカラス此郵便税ハ之ヲ徵收セシ
 國ノ全ク所得ニ歸ス

第十九條

締盟各國政府ハ郵便税前掛ノ為メ偽造若クハ已ニ使
 用セシ郵便切手ノ詐欺使用ヲ所罰スル為メ必要ノ處
 本法ヲ設ケ或ハ此處本法ヲ其議會ニ提出スヘキコト

ヲ約定ニ且ツ他ノ加盟國郵政廳ノ發行スル郵便切手
ト區別ニ難ク模造又ハ偽造セシ郵便切手ノ詐欺製造
販賣行賣及分配ヲ禁遏責罰スル為ノ必要ノ處分法ヲ
設ケ或ハ此處分法ヲ其議會ニ提出スヘキコトヲ約定
ス

第十九條

價額公記書状及箱物並ニ郵便為替郵便小包貯金取立
商券身元証明帳新聞豫約等ノ事務ハ聯合國中ノ數國
又ハ團體ノ間ニ特別ノ約定ヲ以テ定ムルモノトス

第二十條

一 聯合諸國郵政廳ハ協議ノ上實施ニ必要ト認ムル
總テノ手續細目ヲ實施規則ヲ以テ定ムルコトヲ
得

外務省

二 聯合諸國ノ郵政廳ハ聯合一般ニ關ヒサル事項ニ
付テハ互ニ必要ノ約定ヲ締結スルコトヲ得但シ
其約定ハ本條約ニ抵觸スルヲ得ス

三 然レトモ聯合諸國ノ郵政廳ハ三十キロメートル
以内ノ地ニ限り其郵便税ノ低減ヲ約定スルコト
ヲ得

第二十一條

一 本條約ノ諸條款ニ記載スルモノヲ除キ本條約ハ
各國ノ制法ニ何等ノ變更ヲ及ホスコトナシ
二 又本條約ハ締盟各國ノ其郵便事務ヲ改良スルノ
目的ヲ以テ他ノ條約ヲ締結又ハ保持シ或ハ更ニ
親密ナル聯合ヲ開設又ハ保持スルノ權利ヲ箱束
スルコトナシ

104

第二十二條

一 萬國郵便聯合總管理局ノ名義ヲ以テ一箇ノ中央局
 ヲ保持シ瑞西郵政廳ヲ以テ之ヲ監理セシメ其費
 用ハ各聯合郵政廳之ヲ分擔スヘシ

二 萬國郵便聯合總管理局ノ任務ハ萬國郵便事務ニ関
 スル各般ノ狀況報告ヲ集メテ印刷配付シ若シ聯
 合諸國ノ間ニ異議ヲ生スルトキハ其異見ヲ有ス
 ル各廳ノ請求ニ應ジテ意見ヲ付シ又大會議ノ決
 議ヲ変更スルノ建議アルトキハ之ヲ通知シ及其
 決局ヲ通告シ且ツ聯合ノ利益ニ関スル各般ノ事
 項ヲ考察施行スルニアリ

第二十三條

一 本條約ノ解釋又ハ書留郵便物紛失ニ関スル郵政
 廳ノ責任ニ對シ聯合ノ二廳以上ノ間ニ異見ヲ生
 スルトキハ仲裁ヲ以テ之ヲ裁決ス而シテ之ヲ裁
 決セシムル為メ異見ヲ有スル各廳ハ此事件ニ直
 接ノ關係ヲ有セサル聯合ノ他ノ一廳ヲ各自ニ推
 撰スヘシ

外務省

二 仲裁ノ裁決ハ其仲裁員ノ過半数ノ意見ヲ以テ之
 ヲ決定スヘシ

三 若シ可否ノ意見同數ナルトキハ其異見ヲ決定セ
 シムル為メ仲裁總員ハ等シク此事件ニ關係ヲ有
 セサル他ノ一廳ヲ推撰スヘシ

四 本條ノ條款ハ前第十九條ニ據リ締結セル諸約定
 ニモ亦均ニ適用スルモノトス

第二十四條

109

一 本條約ニ加盟セザル諸國ハ其請求ニ依リ加盟スルコトヲ得
 二 此加盟ヲ為サント欲スルトキハ外交上ノ手續ヲ經テ瑞西聯邦政府ニ通知スヘシ瑞西聯邦政府ハ之ヲ聯合各國ニ轉知スヘシ
 三 聯合ニ加盟シタルモノハ本條約ノ定ムル諸節目ヲ遵奉シ且ツ其利益ヲ享有スルハ勿論タルヘシ
 四 瑞西聯邦政府ハ加盟セント欲スル國ノ政府ト恊議ノ上其國ノ郵政廳ニ於テ互擔スヘキ万国郵便聯合總管理局ノ經費ヲ定メ且ツ時宜ニ依リ第十條ニ從ヒ同廳ノ徵收スヘキ税額ヲ定ムヘシ
 第二十五條
 一 聯合諸國ノ政府若クハ郵政廳三カノ二以上ヨリ會議ノ開設ヲ要請シ或ハ賛成スルトキハ其事項ノ輕重ニ從ヒ締盟各國全權委員ノ大會議若クハ單ニ郵政廳員ノ小會議ヲ開クヘシ
 二 然レトモ此大會議ハ少クトモ五年毎ニ一回必ス之ヲ開クヘシ
 三 締盟各國ハ一名若クハ數名ノ委員ヲ派出シ或ハ他國ノ委員ヲシテ代表セシムルコトヲ得然レトモ一國ノ委員ハ自國ヲ合セテ二國以上ノ委員タルコトヲ得ス
 四 會議ニ於テハ諸國各々一ノ表決權ヲ有スルモノトス
 五 各大會議ニ於テハ豫メ其次回大會議ノ開設地ヲ定ムヘシ

外務省

六 小會議ハ萬國郵便聯合總理局ノ發議ニ依リ其開
設地ヲ定ムヘシ

第二十六條

一 聯合各國郵政廳ハ大會議ノ時期ニ至ラサルモ万
國郵便聯合總理局ヲ經テ聯合ノ成規ニ関スル發
議ヲ他廳ニ提出發送スルノ權利ヲ有ス

二 凡テ發議ハ左ノ方法ニ準據スヘシ

聯合各國郵政廳ハ發議ヲ審査シ且ツ時宜ニ依
リ其意見修正又ハ及駁ノ書類ヲ万國郵便聯合
總理局ヘ送付スル為メ五箇月間ノ猶豫ヲ受ク
ヘシ總理局ハ各國ヨリ到達セシ回報ヲ取纏メ
可否ノ發言ヲ促ス書狀ト共ニ各國ヘ通知スヘ
シ萬國郵便聯合總理局カ各國ヨリ回報セシ意

外務省

見テ通告スル第二次回章ノ日附ヨリ起算シ六
箇月以内ニ投票ヲ送付セサル各郵政廳ハ別ニ
何等ノ意見ヲ有セサルモノト見做スヘシ

三 發議ハ左ノ同意ヲ得サレハ實施スルヲ得ス

第一 本條約ニ新條ヲ追加シ又ハ本條中ニ第

二條、第三條、第四條、第五條、第六條、第七條、
第八條、第九條、第十二條、第十三條、第十五
條及第十八條ノ諸條款ヲ變更セント欲
スルトキハ聯合諸國全體ノ同意

第二 第二條、第三條、第四條、第五條、第六條、第七

條、第八條、第九條、第十二條、第十三條、第十
五條、第十八條及第二十六條ノ諸條款ヲ
除キ其他ノ條款ヲ變更セント欲スルト



キハ聯合諸國三分ノ二以上ノ同意
第三 本條約ノ解釋ニ関スルトキハ單ニ過半
數ノ同意祖シ前第二十三條ニ記載スル
異見ヲ生スル場合ハ此限ニアラス

四 有効ノ決議ハ第一及第二ノ場合ニ於テハ外交上
ノ宣言書ヲ以テ確認ス此宣言書ハ瑞西聯邦政府
ニ於テ調製シ締盟各國ノ政府ニ送付スルモノト
ス而シテ第三ノ場合ニ於テハ單ニ万国郵便聯合
總管理局ヨリ聯合各郵政廳ヘノ通知書ヲ以テ確認
スヘシ

五 凡テ可決セシ決議又ハ變更ハ報知ノ後少クモ二
箇月ヲ經過セザレハ之ヲ實施セス
第二十七條

外 務 省

第二十二條、第二十五條及第二十六條ヲ實施スルニ當
リ左ノ諸國ハ時宜ニ依リ各々一國或ハ一郵政廳ト看
做スヘシ

- 第一 英領印度
- 第二 加那太領
- 第三 濠太刺利英領諸殖民地
- 第四 丁抹諸殖民地
- 第五 西班牙諸殖民地
- 第六 佛蘭西諸殖民地
- 第七 和蘭諸殖民地
- 第八 葡萄牙諸殖民地
- 第二十八條

本條約ハ千八百九十二年七月一日ヨリ實施シ永久無

期ニ其効力ヲ有スヘシ然レトモ締盟各國ハ其政府ヨ
リ瑞西聯邦政府ヘ一箇年前ニ報知スルトキハ聯合ヨ
リ退盟スルノ權利ヲ有ス

第二十九條

- 一 従前各國或ハ各郵政廳ノ間ニ於テ締結シタル條
約約定約束及ヒ取極ノ條款中第二十一條ニ掲ク
ル權利ヲ除キ本條約ノ節目ニ牴觸スルモノハ都
テ本條約實施ノ日ヨリ廢止スヘシ
- 二 本條約ハ可成速ニ批准ヲ受クヘシ而シテ此批准
書ハ維也納ニ於テ互ニ交換スヘシ
- 三 前掲諸國ノ全權委員ハ此條約ヲ確證セシ為メ千
八百九十一年七月四日維也納ニ於テ此條約ニ姓
名ヲ連署スルモノナリ

外務省

(姓名ハ之ヲ畧ス)

萬國郵便聯合附屬條約

下ニ氏名ヲ連署スル各國政府ノ全權委員ハ維也納万国郵便大會議ニ於テ議決セシ條約書ニ記名調印スルニ當リ協議決定セシ條款左ノ如シ

第一條

條約第六條ニ於テ書留手数料ノ最高額ハ二十五「サンチム」ト定メタル條款ノ存スルニ拘ハラヌ歐羅巴以外ノ諸國ニ於テハ差出入ニ交付スル領收証ヲ合シ從前ノ如ク該最高額ヲ五十「サンチム」ニ保持シ得ヘキコトヲ約定ス

第二條

條約第八條ノ條款ヲ存スルニ拘ラス歐羅巴以外ノ諸國中現時其法制上解償責任ノ原則ヲ認許セサル國ノ郵政廳ハ其法制部ノ認許ヲ得ルトキ迄一時便宜ノ爲メ其原則ノ實施ヲ遷延スルノ自由ヲ保持スルコトヲ約定ス但シ其實施ノトキ迄ハ聯合ノ他郵政廳ニ於テモ同國ニ發者スル書留郵便物ノ遞送中ニ於ケル約定ニ對シ積金ヲ支拂フノ義務ヲ有セス

第三條

万国郵便聯合ニ加盟セル「ボリビア」智利、古西多利加「ドミニカ」共和國「エラワドル」ハイチ「ホンデュラス」及「ニカラガ」ノ諸國ハ本大會議ニ其委員ヲ派出セザリシヲ以テ本大會議ニ於テ締結セシ諸條約若クハ單ニ其一部ニ加入ニ得セシムル為メ署名ノ場所ニ餘白ヲ存ス濠太刺英領殖民地ノ委員ハ本大會議ニ於テ千八百九十二年十月一日以降万国郵便聯合ニ加盟スルノ意思

ヲ宣言セシテ以テ該殖民地ノ為メ均シク署名ノ場所ニ餘白ヲ存ス

南亞弗利加共和國ノ委員ハ本大會議ニ於テ萬國郵便聯合ニ加入スルノ期日ハ他日決定スルノ約束ヲ以テ加盟スルノ意思ヲ宣言セシテ以テ該共和國ノ為メ均シク署名ノ場所ニ餘白ヲ存ス

現時萬國郵便聯合ニ加盟セサル諸國ヲ以テ他日加盟スルノ便宜ヲ得セシムル為メ均シク其署名ノ場所ニ餘白ヲ存ス

第四條

本大會議ニ於テ締結セシ本條約若クハ諸條約、或ル部外ヲ限リ本日委員ノ署名セシ國々ヲ以テ他ノ諸條約若クハ其一部分ニ加盟シ得ルノ便宜ヲ得セシムル為メ其署名ノ場所ニ餘白ヲ存ス

第五條

第三條ニ記載スル加盟ノ件ハ各國政府ヨリ外交上ノ手續ヲ經テ填地利洪易利帝王國政府ハ報知スヘシ但シ其報知ノ期限ハ千八百九十二年六月一日トス

第六條

本日條約ニ於テ署名セシ郵便諸條約ニ加盟セル一國又ハ數國ニ於テ此諸條約ノ一部若クハ他ノ部分ニ付批准セサルコトアリト雖モ此條約ハ他ノ批准セラルヘキ國々ニ對シテ効力ヲ有スルモハトス
下ニ記載スル全權委員ハ之ヲ確證スル為メ附屬條約ヲ調製シ各々之ニ氏名ヲ連署ス此附屬條約ノ條款ハ其諸條約本文中ニ記載シタルモノト同一ノ効力價値

ヲ有ニ其正本ハ瓊地利政府、文庫ニ保管ニ其正寫ハ
一部ツ、各國ニ送付ス

千八百九十一年七月四日維也納ニ於テ調製ス

(姓名ハ畧ス)

外務省

日耳曼、亞然的音共和國、澳地利、洪易利、白耳義、伯西兒、勃爾瓦利、智利、古西多利、加共和國、丁抹及其殖民地、埃及佛蘭西及其殖民地、伊太利、日本、リベリア共和國、歷山堡、那威和蘭及其殖民地、葡萄牙及其殖民地、羅馬尼、薩瓦多、暹羅王國、瑞典、瑞西、突尼斯、攝政國、土耳其及、ルゲールノ間ニ締結セル郵便為替事務約定
下ニ氏名ヲ連署セル前掲各國政府ノ全權委員ハ郵便本條約第十九條ニ據リ更ニ各國ノ批准ヲ受クヘキモノトシテ協議決定セシ餘款左ノ如シ

第一條

郵便為替締盟國中其郵政廳ニ於テ互ニ郵便為替業務ノ開設ヲ承諾シタル諸國ノ間ニ郵便為替ノ方法ニ依ル金錢ヲ交換スルハ本約定ノ諸條款ニ準據スヘシ

外務省

第二條

一 為替金額ハ正金ニテ差出人ヨリ受領シ受取人ニ拵渡ヲ通則トス然レトモ各郵政廳ハ其國內ニ通用スル紙幣ヲ以テ為替金受拵ニ充用スルヲ得但ニ相場上差額ヲ生スルトキハ其差額ヲ算入スヘキモノトス
二 為替一口ノ金額ハ五百フランニシテ若クハ其他ノ貨幣ナルトキハ之ニ最近ノ額ヲ超過スヘカラス
三 關係郵政廳ノ間ニ特殊ノ約定アルモノヲ除キ其他ハ拵渡國ノ正貨ヲ以テ為替券面ニ其金額

ヲ記載スヘキ振出國郵政廳ハ時宜ニ依リ自國ノ貨幣ヲ拂渡國ノ正貨ニ換算スヘキ割合ヲ定ムヘキ

振出國及拂渡國ニ於テ其貨幣ノ制度ヲ同フスルトキハ振出國ノ郵政廳ハ時宜ニ依リ前段ト同シク差出人ヨリ受領スヘキ相場額ヲ定ムヘキ

四 締盟各國ハ其領地内ニ於テ締盟ノ他國ヨリ到達セキ郵便為替ノ所有權ヲ裏書ノ方法ニ依リ讓渡ヲ許可スルノ權利ヲ有ス

第三條

一 前條ニ據リ送付スル各為替ニ對シ差出人ヨリ徴收スヘキ為替料ハ二十五フランク或ハ其端數

ニ付二十五サニチルハ又他ノ貨幣ニシテ端數ヲ生スルトキハ全數ニ切上ケ之ト相当ナル金額トス

外務省

郵便事務ニ関シ諸郵政廳ノ間ニ互ニ送付スル事務用為替ハ都テ其為替料ヲ免除スヘキ

二 振出國郵政廳ハ事務用為替ヲ除キ拂渡國郵政廳ニ對シ手数料トシテ其拂渡ニタル為替金ノ全額二百分ノ一ヲ支拂フヘキ

三 郵便為替券及券面ニ記載スヘキ受取書並ニ差出人ニ交付スル領收証ヲ付テハ本條第一項ニ依リ徴收スル為替料ノ外何等ノ税金或ハ料金ヲ差出人又ハ受取人ヨリ徴收スルヲ得ス但シ時宜ニ依リ受取人ノ住所ニ就キ拂渡ヲナス為

コトヲ得

外務省

四 郵便為替差出人振出國ニ於テ書留郵便物、到達証ニ課スル手数料ト同額ナル料金ヲ預メ仕拂フトキハ為替金拂渡、通知書ヲ受クルコトヲ得但シ此料金ハ振出國郵政廳、所得ニ歸スルモノトス

五 郵便為替差出人ハ郵便本定約第九條ニ依リ通常郵便物ニ關シ定ムル規則及特例ニ準據シ未タ受取人ニ為替ヲ配達セサル間ハ其取戻若クハ其名宛ヲ変更スルヲ得

六 又差出人ハ前記條約第十三條ニ定ムル規則ニ準據シ為替到着、後直チニ特別ノ配達人ヲ以テ受取人、住所ニ就キ金錢拂渡、請求ヲ為スコトヲ得

七 然レトモ到達國郵政廳ハ其内地ノ規則ニ依リ金錢ノ代リニ為替到着、報知書若クハ為替券ヲ別配達ニテ送付スルヲ得

第四條

一 郵便為替ハ官設電線ニ依リ連通スル諸國郵政廳又ハ該為替ノ為メ私設電線ノ使用ヲ承諾スル郵政廳ノ間ニ於テハ電信ヲ以テ之ヲ交換スルヲ得此場合ニ在テハ電信為替ト稱ス

二 電信為替ハ通常電報ト均シク且ツ之ト同一ナル取扱ヲ以テ至急送信料濟照校受信報知郵便配達若クハ別配達ノ手数料ヲ經ルコトヲ得ヘク又郵便ニ依リ送付ニ差出人ニ交付スヘキ拂渡

通知書ヲ請求スルヲ得

三 電信為替、差出人ハ左ノ料金ヲ拂フヘシ

甲 卸便為替料又掛渡通知書ヲ請求スルト

キハ其手数料

乙 電信料

四 電信為替ハ本條ニ定ムル料金若クハ万国電信

規則ヲ準據シテ徴收スルモノ、外何等ノ料金

等ヲ課セサルヘシ

第五條

受取人其住居ヲ移轉セシトキ通常為替ハ本約定ニ

加盟セル甲國ヨリ乙國ヘ宛テ再發スルヲ得新名宛

國ニ於テ最初ノ名宛國ト貨幣ノ制度ヲ異ニスルト

キハ該為替金額ハ最初ノ名宛國ヨリ新名宛國ニ振

外務省

宛ツル為替ニ對シ定メタル割合ニ從ヒ再發卸便局

ニ於テ新名宛國ノ貨幣換算スヘシ右再發ノ為メ特

ニ為替料ヲ徴收セス但シ新名宛國ハ假令振出國ト

最初ノ名宛國トノ間ニ締結セル特殊ノ約定ニ依リ

徴收スル為替料ニシテ本約定第三條ニ定ムル料金

額ヨリ低下ナルトキト雖モ直達ノ為替ニ對シ受收

スヘキ為替料ノ分前ヲ其所得トシテ收入スヘシ

第六條

一 締盟各國郵政廳ハ實施細目規則ニ定ムル時期

ニ至リ計算書ヲ調製シ卸便局ニ於テ掛渡シタ

ル金額ヲ集記シ互ニ調査審定ノ上特別ノ約定

アルモノヲ除キ其他ハ同規則ニ定ムル期限内

ニ借越郵政廳ヨリ貸越國ノ金貨ヲ以テ其差額

ヲ仕拂フヘシ

二 為替金拂渡ニ用ヒタル貨幣其種類ヲ異ニスル
トキハ少額ノ貸高ヲ多額ノ貸高ト同一ノ貨幣
ニ換算スヘシ但シ計算期限中借越國ノ都府ニ
於ケル兩換平均相場ヲ以テ換算ノ基礎トス
三 定期間ニ計算上ノ差額ヲ仕拂ハサルトキハ期
限経過ノ日ヨリ起算シ其仕拂ノ日迄利子ヲ付
ス此利子ノ割合ハ一箇年五今ト定メ仕拂ヲ延
滞シタル郵政廳ノ借高トシテ次期ノ計算書中
ニ記入スヘシ

第七條

一 卸便為替金額ハ受取人又ハ其代理人ニ正シ之
ヲ拂渡ストキ迄差出人ニ對シ保証スヘキモノ
トス

外務省

二 各郵政廳ニ拂込ミタル卸便為替金ハ振出國ノ
法律規則ヲ以テ定メタル期限内ニ其権理者ヨ
リ請求ナキトキハ之ヲ振出シタル郵政廳ノ所
得ニ歸スヘシ

第八條

本約定ハ締盟各國カ萬國卸便為替事務ヲ改良スル
ノ目的ヲ以テ特殊ノ約定ノ締結又ハ保持ニ或ハ更
ニ親密ナル聯合ヲ開設又ハ保持スルノ權利ヲ箱束
スルコトナシ

第九條

各郵政廳ハ萬國卸便為替事務ヲ中止セサルヲ得サ
ル非常ノ事故アリテ其理由ヲ證明シ得ル場合ニ於

テハ其全部或ハ其一部ヲ一時停止スルヲ得但シ此
場合ニ於テハ其旨ヲ速ニ又必要ナルトキハ電報ヲ
以テ關係郵政廳ニ報知スヘシ

第十條

此約定ニ未タ加盟セサル聯合諸國ハ其請求ニ依リ
及郵便本條約第二十四條ニ掲載スル萬國郵便聯合
ニ加盟ノ手續ニ從ヒ加入スルヲ得

第十一條

締盟各國郵政廳ハ前記ノ諸條項ニ據リ發行スル為
替ノ受辨局ヲ指定シ為替遞送ノ方法並ニ第六條ニ
掲載スル計算ノ手續其他此約定實施ニ必要ナル細
目規則ヲ定ムヘシ

第十二條

外務省

一 締盟各國郵政廳ハ郵便本條約第二十五條ニ記
載スル會議ノ時期ニ至ラサルモ萬國郵便聯合
總理局ヲ經テ郵便為替事務ニ關スル發議ヲ他
廳ニ提出發送スルノ權利ヲ有ス

二 凡テ發議ハ郵便本條約第二十六條第二項ニ定
ムル方法ニ準據スヘシ

三 此發議ハ左ノ同意ヲ得サレハ實施スルヲ得ス

第一 本約定ニ新條ヲ追加シ又ハ本條及第

一條第二條第三條第四條第六條並ニ

第十三條ノ諸條款ヲ変更セント欲ス

ルトキハ締盟諸國全體ノ同意

第二 前記ノ諸條款ヲ除キ其他ノ條款ヲ變

更セント欲スルトキハ締盟諸國三分

、二以上ノ同意

第三 本約定ノ解散ニ関スルトキハ單ニ過半数ノ同意但シ郵便本條約第二十三條ニ記載スル異見ヲ生スル場合ハ此限ニアラス

四 有効ノ決議ハ第一及第二ノ場合ニ於テハ郵便本條約第二十六條ニ記載スル方式ニ從ヒ外交上ノ宣言書第三ノ場合ニ於テハ同條ニ據リ郵政廳ヘノ通知書ヲ以テ確認スヘシ

五 凡テ可決セシ決議又ハ修正ハ報知ノ後少クモ二箇月ヲ經過セサルハ之ヲ實施セス
第十三條

一 此約定ハ千八百九十二年七月一日ヨリ實施ス
外務省
ヘシ

二 此約定ハ郵便本條約ト同一ノ効力期限ヲ有ス
ヘシ然レトモ各國ハ其政府ヨリ瑞西聯邦政府
ヘ一箇年前ニ通知スルトキハ此約定ヨリ退盟
スルノ權利ヲ有ス

三 締盟諸國ノ政府若クハ郵政廳ノ間ニ曩ニ締結
シタル約束ニモテ第八條ニ記載スル權利ヲ除
キ本約定ノ條款ニ牴觸スルモノハ都テ本約定
實施ノ日ヨリ廢止スヘシ

四 本約定ハ可成速ニ各國ノ批准ヲ受クヘシ而シ
テ批准書ハ維也納ニ於テ互ニ交換スヘシ
前掲諸國ノ全權委員ハ此約定ヲ確認セシ為メ
千八百九十一年七月四日維也納ニ於テ此約定

姓名ヲ連署スルモノナリ

(姓名ハ之ヲ畧ス)

外務省

7-0199

0246

萬國郵便條約第十六條中、修正

明治二十五年六月二十三日布告、勅令萬國郵便條約第十六條第一項甲左、如ク修正ス

甲 少クモ郵便税、一部分ヲ前拂セサル、若クハ信書又ハ現ニ相互ノ間ニ往復スル通信文ノ性質ヲ具フル書類ヲ含有スル、若クハ容易ニ檢査シ得ル如ク包装セサル訴訟用及商業用書類商品見本並ニ印刷物

(明治二十七年二月六日勅令)

外務省